

鵠沼

久 久 比 奴 末

はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 8 0 号

鵠沼の歴史的家屋をたずねて⑤

鵠沼の別荘時代を代表する

ロマンチックな西洋館「渡辺邸」 編集委員会1

分かってきた「ステルンさん」の横顔

——日・独二人の法学者の研究から 高三 啓輔9

葛巻左登子さんを偲ぶ

.....中島舞子 寺内佐恵子 鈴木ひさ子 細井 守17

記録少年のころの鵠沼 葉山 峻23

一木通り草莽記 竹中 英輔45

第二十三世本因坊坂田栄寿と鵠沼 鈴木三男吉52

史跡見学 —— 鵠沼本村地区 中島 明58

平成11年度公民館まつりの記録 編集委員会61

「鵠沼を語る会」活動の記録 総務委員会63

編集後記

『新編相模風土記稿』（天保13年、1842）に、「鵠沼村久久比奴末半良」

とあり、当時は“くぐいぬま”と呼んでいたことが分かる。

鵠沼を語る会 発行

鵜沼の歴史的な家屋をたずねて⑤

鵜沼の別荘時代を代表する

ロマンチックな西洋館

渡 辺 邸

明治30年代後半、鵜沼の別荘地開発の創世期にいち早く百両山の丘陵を境川に沿って南に下る土地（現江ノ電鵜沼駅前の松が岡1丁目の北端、ルーテル教会から南に約7000坪）をご当主故渡辺 実氏の父君、渡辺 莊氏が大給近孝子爵から購入（坪1円でと伺っている）、この広大な敷地に木造平屋の和風住宅を建てられた。これが渡辺家の鵜沼との繋がりの中で最初であった。当時渡辺家は東京麹町に本邸を構えておられ、鵜沼は別荘としてお使いになっていた。しかしあの関東大震災のおり倒壊、実氏が熟考の上、再興されたのが「鵜沼の別荘時代を代表するロマンチックな西洋館」で昭和9年のことだったという。

近年、日本建築学会の日本近代建築総覧にも掲載され昭和63年には横浜国立大学の吉田鋼市助教授（当時）により県の近代洋風建築調査がなされた。その素晴らしさはテレビ放送や専門誌にも取り上げられ各方面から注目されるに至った。

昨年5月に実施した、鵜沼公民館主催の青少年対象の鵜沼南部地区史跡めぐりの順路に本邸見学を組み入れたく、ご意向をお伺いしたところ気持ちよくご承諾くださいました。その実氏が直後に体調をくずされ、突然ご昇天なされました。（享年94歳でいらした）。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

この度、奥様始めご遺族のご好意により、本邸を拝見させて頂く機会を得ましたので、ここに写真と共に吉田先生の克明な調査報告書を掲載し、紹介致します。

建物は施主の故実氏と設計の三井道雄氏、施工の小林富蔵氏の三者が緊密な協力のもと、震災後の経験に基づく耐震構造を取り入れ、隅々まで気を配ったピクチャレスクな趣を持つ、別荘地にふさわしい雰囲気のある館です。しかし残念な事に創建から65年、慈しみ磨き上げてこられた実氏が世を去られて見ると、この貴重な建物の保存は、個人の力で維持していくには限度があり、行政も財政難のご時世でもあり、何か良い手だてはないものかと、思案されていると聞き及びます。いままぐの解体と言う事ではないようですが、厳しい現況にあることを報告いたします。

編集委員会記

神奈川県近代洋風建築調査報告書_{より}

調査年 昭和63年

調査担当者 横浜国立大学理工学部 吉田 綱市助教授（当時）

《 渡 辺 邸 》（藤沢）

所在地 藤沢市鵠沼松が岡1丁目3番地6号

建築年 昭和9年（1934年）

設計・施工 ^{みい}三井道雄設計、小林富蔵施工

構造 木造三階建て、地下ボイラー室付き、コンクリート布基礎、洋小屋組

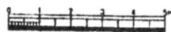
規模 床面積一階 198.40㎡、二階 106.47㎡、三階 60.44㎡、地階 12.37㎡、計 377.68㎡

仕上 屋根、銅板瓦棒葺き、一部亜鉛引鉄板葺き、外壁、木骨造モルタル塗り、一部鉄平石張り。

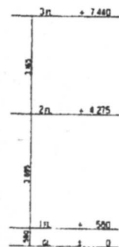
（イ）沿革

渡辺邸は昭和8年から9年にかけて創建された。元来、この地は渡辺実氏の父君である渡辺荘氏の別邸が建っていた所である。当時は現在の鵠沼駅から境川に至る7千坪にも及ぶ広大な敷地であった由だが、明治40年頃には既に現渡辺邸とはほぼ同じ位置に、木造平家の和風住宅が建てられていた。これは震災で倒壊したが、昭和7年の実氏のご結婚を機に、実氏の意図のもとに建てられたのが現在の渡辺邸である。したがって渡辺邸は創建以来居住者の変わらない貴重な建物ということになる。

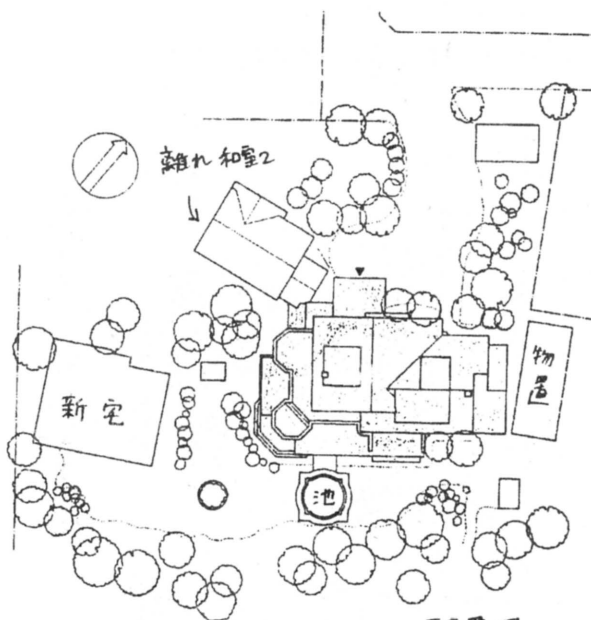
渡辺邸の設計は、実氏の母校早稲田大学出身の^{みい}三井道雄という建築家に託された。三井道雄は、当時岡田信一郎の事務所に勤務していたという。早大卒業が大正4年であるから設計当時は四十才を少しすぎた所であろうか、建築家として乗った時である。そして施工を担当したのが、当時東京麻布区飯倉町で大工を営んでいた小林富蔵という人である。小林富蔵が昭和8年11月に記した詳細な「渡辺家御別荘新築工事御見積書」があるが、それによれば見積額は22、475円となっている。しかし実氏によれば、どんどん費用はかさんで結局4万円ほどになったという。また三井道雄の手になる創建時の図面も一揃い残されており、渡辺邸は創建以後の改造についてもよくわかる。このように渡辺邸は、施主、設計・施工者が明らかで、創建時の図面も存在する、要するに建築の履歴が明確な得難い遺構である。



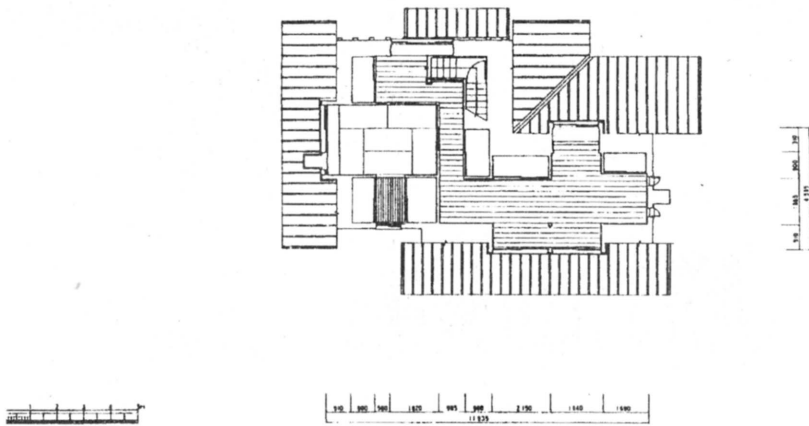
渡辺邸
南立面図



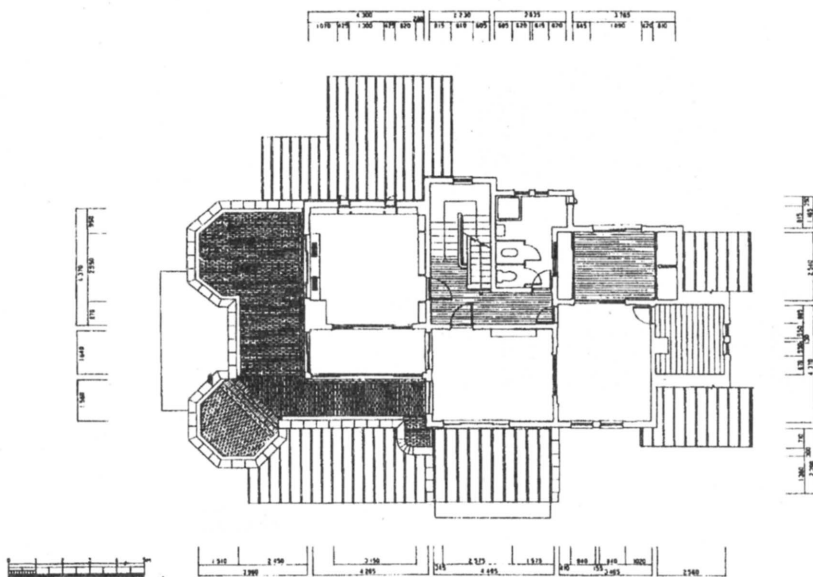
渡辺邸
A-A断面図



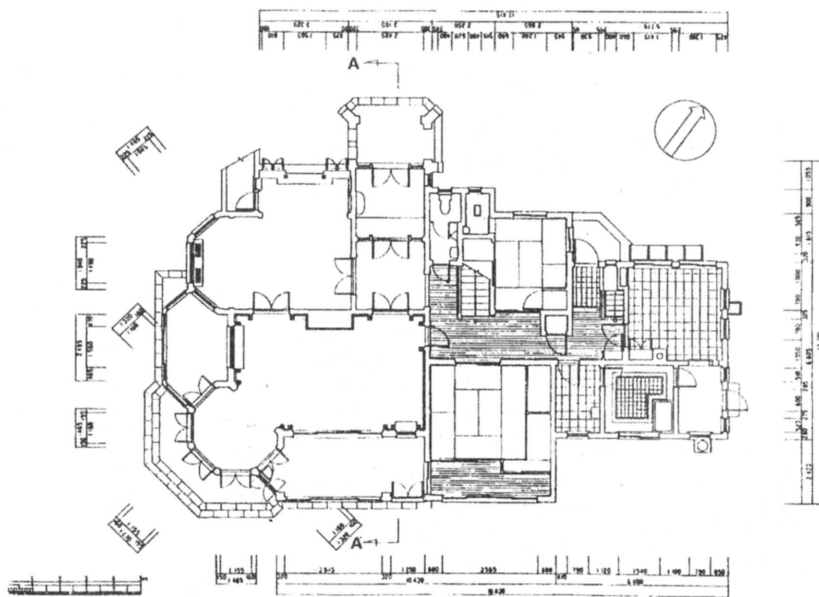
配置図



渡辺部
3階平面図



渡辺部
2階平面図



渡辺部
1階平面図

さて、創建後の変遷であるが、昭和15年、同じく三井道雄によって約46㎡の木造平家和風離れが既存建物の北西方向に新築され、両者が廊下でつながれた。この時、応接室の西北隅部分に連絡のためのドアが取り付けられるなどの僅かな改造が行われている。戦後、こうした建物の例に漏れず米軍に接収され、やっと昭和29年に解除になったという。この間、内装が若干変えられたらしいが、さしたる改造は受けていない。その後、一階食堂兼居間の南側と西側のヴェランダがサンルームとして内部空間にとり込まれ、二階東端部にあったバルコニーが取り去られ、その一部が内部空間としてとり込まれ物置になるといった改造は見られるものの、根本的にはさしたる改変は見られず貴重である。なお当初の広大な敷地は次第に狭められ、わずかに一割弱をとどめることになった。そして昭和58年、敷地の西隅に木造二階建てが新築されて今日に至っている。

(ロ) 建築的特徴

渡辺邸はハーフティンバーのスタイルであるが、そのスタイルが本来もっている民家風の調子をよく保っている。外観・内装ともに野趣に富んだ雰囲気であり、常住を意図した住宅ではあるが、いかにも別荘地の住宅にふさわしい。また規模はそれほど大きくないが、意匠によく意を用いた建築である。

さて、渡辺邸は玄関のあるファサードをほぼ北西方向に向けてたつが、便宜上これを北側として以下に叙述したい。外観はハーフティンバーの壁面を粗塗りのモルタルおよび鉄平石で仕上げている。ハーフティンバーとは、元来「半木造」を意味し、下階は石造あるいは煉瓦造、そして上階だけを木造にした建物をさして用いられた。渡辺邸の北側ファサードは、一階部分はほぼ鉄平石張りであるから、その意味でもこれは典型的なハーフティンバーのイメージと言える。この鉄平石張りは、南側ファサードではあまり用いられておらず、モルタル塗りの白壁を大きく見せている。したがって外観は玄関側の方が重厚であるが、重厚とは言ってもあちこちに凹凸があり、屋根も複雑にかかり、全体の調子は極めてピクチュアレスクであることには変わりない。屋根は銅板瓦棒葺きの切妻だが、軒先の方で軽やかに反っており、また屋根窓あり庇ありで、実に賑やかである。窓も上げ下げ窓、両開き窓、片開き窓、引き違い窓と多様である。

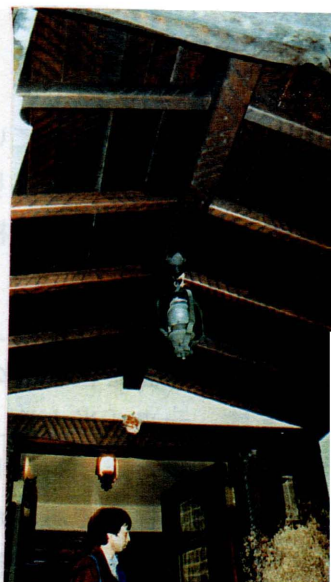
外観は洋風で統一されているけれども、内部は和室も多い。すなわち一階プランでは、玄関を通る南北軸の西側が洋室部、東側が和室およびサービス部と截然と分けられている。まず洋室部であるが、これは玄関ホールの西側が応接室、南側が居間兼食堂である。応接室は西側に八角形の突出部をもち、居間兼食堂は南



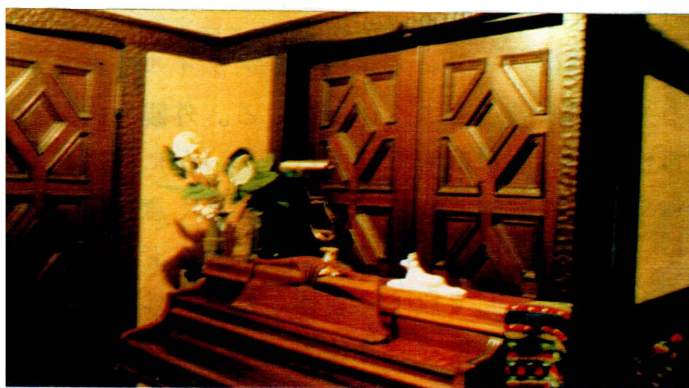
玄関側外観



玄関外観



玄関たき天井



内 玄 関

居間兼食堂入口

居間兼食堂





庭園側外観



テラス外観



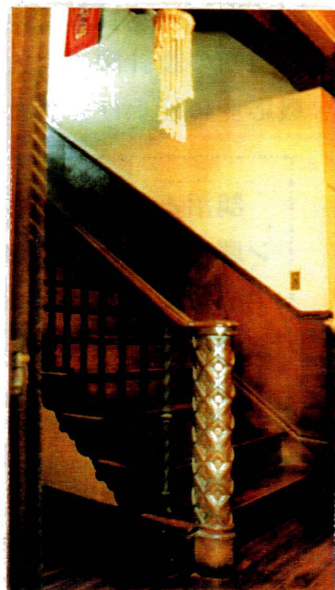
居間兼食堂マンツルピース



居間兼食堂船底天井

一階廊下、階段

八角形突出し部



西隅を八角形に大きく突出させる。先述の通り、今日ではこれら突出部の間のヴェランダを内部空間にとり込んでいるのでそれほどこの凹凸は目立たないけれども、当初はなんとも賑やかなものであったに相違ない。

さて洋室部の内部意匠であるが、その何よりもの特徴はデザイン密度の濃さである。まず柱や梁などの木の表面が、手斧や鉋^{なた}ではつったようなラフな仕上げをされていることが指摘できる。この仕上げは、玄関のドア、勝手口のドア、破風板、垂木、持ち送りなど外観を構成する木材にも施されており、渡辺邸を貫く一大モチーフである。しかも内装では、このはつり方が変えられており、意図の細かさが感じられる。次に指摘すべきは、居間兼食堂と玄関の合計八カ所に設けられたドアの枠縁である。この枠縁は、コリント式柱頭をもつ二本のねじれ柱とエンタブレチュアからなるチーク材製の一種のオーダーであり、形もつくりもみごとに木彫作品である。

以上の二点が渡辺邸の内部意匠の最たるものだが、その他にもいくつか特徴を述べておこう。床は寄せ木張りの通常のものだが、天井は船底天井、ヴォールト風漆喰塗り天井、格天井ありで、これも実に変化に富んでいる。しかも格天井の格縁は、部屋の規模に比して異様に太く、部屋を圧するほどである。この格縁の^{くりがた}削形、あるいはドアや階段親柱の削形など、総じて木部の削形は鋭く陰影に富んでいる。あるいはまた、暖房用のラジエーターのグリルにも建築家の目が行き届いており、それらが相まって極めて濃密な内部空間をつくりあげている。それは建物や部屋の規模からすればうるさいほどであり、建築家三井道雄のこの建物にかけた情熱を感じさせる。この辟易するほどの建築家の臨在、これが渡辺邸の何よりの特徴である。

和風部分についてはとりたてて述べることはない。二階は洋室が三室で、北東隅の部屋のみ畳敷であったようだが、今日ではここも板敷きとなっている。三階は当初の設計図とは大分異なっているが、要するに小屋根裏であり、施工時に臨機応変に仕上げられたものである。 (完)

鵜沼とは違いますが、同じ藤沢市の大鋸に昭和6年に建設された旧モーガン邸がある、当邸は1920年に東京丸ビルを建設するために来日以来、横浜を中心に活躍したアメリカ人建築家J. H. モーガン氏が日本建築の特徴を西洋館の中に取り入れて創った自邸です。創建時の姿がほぼ完全に残っており建築史・文化史的価値の高い建物です。しかし、敷地のミニ開発又は、大蔵省の競売により取り壊しの運命にあり、「旧モーガン邸を守る会」では、保存運動へのご協力を呼びかけています。世話人 桑山直子 0466-82-0982

分かってきた 「ステルンさん」の横顔

日・独二人の法学者の研究から

高三 啓輔(会員)

戦前、鶴沼の商店街で「ステルン」と呼ばれて親しまれながら、その素顔についてはいまひとつはっきりしなかったドイツ人・シュテルンベルクの人物像が、日本とドイツの二人の法学者の研究からようやく明かになってきた。ユダヤ系という理由で故国ドイツに受け入れられず、招かれて日本へ来たものの、結局は不遇のうちに異郷で没した非運の法学者だったのである。

その学識は並外れていて、日本法学界の恩人ともいわれた。在日37年のうち、後半の少なくとも20年を鶴沼で過ごしたことも分かった。今年は「ステルン」さんが亡くなってちょうど50年に当たる。この年を待っていたかのように日・独の二人の法学者が、期せずしてその評伝を書いたことにも奇しきものを覚える。二人の法学者の文章をなぞる形で、鶴沼にはもっとも縁の深かった外人シュテルンベルクの人となりとを記録しておきたい。

シュテルンベルクの評伝を書いた日独二人の法学者とは、東京都立大学名誉教授 千葉正士さんと、ドイツ出身の学習院大学法学部講師 バルテルス=石川アンナさん。千葉正士さんは1960年代に、米・ミネソタ大学に留学した。この時、鶴沼出身で、シュテルンベルクとも深い関わりを持つ同大学東洋学部教授高瀬笑子さん（現在は退職して同学部名誉教授）と知り合った。法学者としてシュテルンベルクに関心を持っていた千葉正士さんは、この巡り会いをきっかけにさらに研究を深め、99年、その成果の一端を有斐閣の図書案内誌『書斎の窓』四、五月号に『シュテルンベルクと日本近代法学』として発表した。

この論稿は思わぬところから反響を呼んだ。長年、シュテルンベルクの研究を続け、すでにシュテルンベルクに関する著作を三冊も書いているバルテルス=石川アンナさんの目にとまったのである。石川アンナさんは母国ドイツの大学院に在籍していた時、シュテルンベルク存在を知り研究を始めた。



晩年のシュテルンベルク(1940年頃)
『書斎の窓』から転載。この写真は
もともと高瀬笑子さんが所蔵してい
たものを千葉正士さんに贈り、さら
にこのほど千葉さんから石川アンナ
さんに贈られた。

その後、中央大学法学部教授石川敏行さんと結婚して日本に移り住み現職についたが、いまなおシュテルンベルクを主要な研究テーマの一つにしている。この春には母国ドイツの出版社からシュテルンベルクに関する四冊目の著作を出版するという。

そのアンナさんが千葉さんの論稿に目をとめ、千葉さんに応ずる形で同年の『書斎の窓』九、一〇月号に『テオドア・シュテルンベルクのこと——千葉正士教授の論稿に接して』を発表した。

このお二人の論証のおかげで、いわば長い間謎に包まれた存在だった「ステルン」さんが、にわかにはっきりとした輪郭で浮かび上がって来たのだった。それは思いもかけない幸運だった。鵜沼の歴史を調べるものとしては、二

人の法学者に心からの謝意を表したい。以下の文章は、千葉さんと石川さんが『書斎の窓』に発表された論稿をなぞりつつまとめたものである。さらに千葉さんの啓示によって知り得た田中耕太郎『生きて来た道』（世界の日本社）、川島武宣『ある法学者の軌跡』（有斐閣）を参考にした。

◆ その出自・学識・教え子たち

シュテルンベルク（Theodor Hermann Sternberg）は1878年1月5日、ドイツの首都ベルリンで生まれた。日本の元号に従えば明治11年である。

ハイデルベルク、ベルリン両大学で法学を修め、21歳の時にベルリン大学で学位を得た後、27歳でスイス・ローザンヌ大学の講師に就任した。母国ドイツの大学へ教授として戻ることを本人も希望し、事実、幾つかの候補大学の名もあがったようだが、結局、それらはすべてつぶれてしまう。理由は彼の出自がユダヤ系であることにあったと、石川アンナさんは書いている。

失意の中にあった彼に、東京帝国大学から外人教師として採用したいという話

が舞い込んだのは1913（大正2）年8月のことだった。こうしてシュテルンベルクは東京帝国大学法科大学（現在の東大法学部）の「独逸法教師」として来日する。35歳の時である。以降、1918（大正7）年8月までの5年間、その職にある。

学識が大変に深く、「東大法学部に今迄外国人であれほどの学者らしい人は来たことがない」と東大の一老事務長が語った（田中耕太郎談）とされるほどの外人教師であり、学究生活ぶりだった。

東大時代の教え子には後に弁護士、司法官になった人たちが多くいる。中でも第一次吉田内閣の文相を務め、さらに最高裁長官になった田中耕太郎や東京大学名誉教授川島武宜がその代表的な人であろう。この二人の教え子は先に挙げた著作の中に、恩師の風姿風貌をきわめて具体的に書き留めている。特に田中は大学三、四年生の時、大学側からの要請もあって、シュテルン来日後の2年間を住み込み書生として起居を共にし、その私生活にわたる面までもつぶさに見た。そのこまごまとしたことは『生きて来た道』の中に述べている。

田中によればシュテルンベルクの学風は「哲学的、歴史的、社会学的であって、ただ法典の注釈というような従来の法科の諸教授の学風とは全然違っていた。何だか本当の学問らしいものがそこにあるような気がした」という。

また川島は東大助教授時代にシュテルンベルクのプライベートゼミに参加したが、その学識の深さ、分析の深さに驚嘆した。「先生は大へんに該博な知識の持ち主でした。法律学だけでなく、社会学や歴史や哲学についても、何を聞いても詳細な、専門的な、レベルの高い答えが返ってくるのです」と『ある法学者の軌跡』に書きとめている。ギリシャ語、ラテン語は字引なしで自由に読め、フランス語も全く自由であった。川島はあるとき、ドイツ法律学史の大冊の本をシュテルンベルクが本当に全部読んだのかどうか試したことがあったらしい。すると質問に対して直ちに一つ一つ細かな返事があって、試した川島を逆に驚ろかせた。

日常生活の中では、奇矯と思われる振る舞いが幾つかあった。

御用聞きが口笛を吹いて路地を通ると、飛び上がって怒鳴った。夜、犬が鳴くと、それが気になって眠れない。夜中の二時頃、犬を黙らせるために、水をいれたバケツとポケット一杯の小石と物干し竿をもって、犬のほえている所までとんで行く。垣根の外からまず石を投げ付け、効き目がないと物干し竿でつつく。それでも効果がないとバケツの水をぶっかけるのである。以上の話は東京・牛込時代の出来事として田中が語っていることで、田中はいつもそのお供をおおせつかっ

たという。犬の鳴き声はよほど嫌いだったらしく、鵠沼でも同じような言い伝えが残っている。身なりにも構わなかった。避暑に出かけた軽井沢や鵠沼などで、子供たちが遠巻きにしてはやし立てたという話が残っている。

◆ その非運と時代の不幸

東大講師としての在任中、シュテルンベルクは「月給千円位はとっていた」（田中談）。法科大学金井延、理科大学（現工学部）長岡半太郎、医科大学（同医学部）三浦謹之助ら当代一流の教授連ともつきあいがあり、自宅で晚餐会を催すことなどもあったらしい。当時の「月給千円」は、現在の金額に直すとほぼ250万円ていどにはなる。

しかし、そうした生活もつかの間で、1918（大正7）年には東大から契約満了をもって解雇される。「大学の経済からみて外国人に高給を払うのは馬鹿らしい、むしろ外国人一人に払う分をもって日本人二人の先生を養成したほうがいい」

（田中談）という大学の方針もあったらしく、シュテルンベルクだけでなく他の外国人教師もいっせいにお払い箱になってしまった。1921（大正11）年から45（昭和20）年までは慶応義塾、中央、法政、日本、明治各大学で非常勤講師としてドイツ民法・刑法、法哲学・法理論、法社会学などを教えた（石川さんによる）が、生活はかなり逼迫していたらしく、たとえば川島は次のように書いている。

「せめて学士会館の食堂で食事くらいされるだろうと思っていたら、そうではないのです。先生はゼミの部屋に着くとパンとチーズなどをかじりながら講義されるのです」

川島のいうこのゼミも、生活の一助にでもなればという教え子たちの発案で行われていたプライベートなゼミだった。シュテルンベルクは単に同情的に金銭的な補助を受けるのは潔しとしなかった。また語学だけを教えるのは法学者としての品位にかかわると思うところもあったらしい。

シュテルンベルクの不遇をさらに強めているのが、家族との離散である。

石川さんによると、シュテルンベルクは1902（明治35）年、ドイツでユダヤ人女性ポーラ・ハイネマンと結婚、翌年には長男ローベルトが誕生した。しかし、妻との間は結婚初期の段階ですでに破綻していたようで、シュテルンベルクは離婚を望んだ。妻はそれを拒み、シュテルンベルクは乏しい中で家族へ生活費の一部を送り続けた。ドイツではシュテルンベルクの友人たちが、妻に原稿の浄書などを依頼してその生活を助けるという状況だった。

1929年ごろ、ドイツの友人がドイツ国内の大学へ就職のための最後の働きかけをするが、結局これもだめになる。この時期のドイツはヒトラー政権樹立（1933）の前夜にあたり、35年にはユダヤ人の公民権を剥奪するニュルンベルク法が公布される。シュテルンベルクはこの最後の働きかけがだめになった時点で、故国へ帰ることを断念したのではないかと石川さんは推定する。

ドイツでは長男ローベルトが、法律家としての道を歩き始めていた。しかし、これもユダヤ人であることが父と同じように大きな障害となっていた。法律修習生として研修中、ユダヤ人であることを理由に罷免されるのである。1936年、ローベルトはドイツを逃れるように父を頼って来日した。ニュルンベルク法が公布された翌年である。しかし、2年後、さらなる非運が重なる。ローベルトが病を得て日本滞在中に亡くなってしまうのである。35歳という若さだった

ドイツにいる家族にも、ナチの迫害の手は及んでいた。母は辛うじて米国への脱出に成功するが、医者であったシュテルンベルクの妹は出国が遅れ、結局、アウシュビッツの強制収容所で亡くなった。妻の行方について、石川さんは八方手を尽くしたが、ついに詳細を調べることができなかったと書いている。

◆ 鷗沼の中のシュテルンベルク

鷗沼でのシュテルンベルクの生活の一端を書き留めていたのが、先に挙げたミネソタ大学名誉教授高瀬笑子さんだった。その著『鷗沼断想』の中に次のような一節がある。

「後に矢代（引用者注・美術史家矢代幸雄のこと）と結婚した叔母がまだ一人だった頃、叔母に連れられてステンベルヒの所へ幾度か遊びに行ったことがある。……テーブルの上に十種類位のジャムだのジェリだの並んでいて、それをスプーンで一つ一つすくってなめたこと、きれいなチョコレートが花柄のお皿にたくさんあったことなどを思い出す。ステンベルヒはピアノの前に叔母と並んで座って連弾するのが好きだった」

笑子さんは、この記憶を4歳のころとされているから、大正10年ごろのことかと思われる。シュテルンベルクは「戦争の始まる前には既に辻堂の浜見山に移っていた」（同書）が、そこへも笑子さんはドイツ語を習いに通った。それは恐らく戦後のことで、シュテルンベルクは70歳近くになっていたはずである。

「帰りは辻堂へ戻らずに、芦や葎の生えているところを通り、日之出橋を渡って小田急の鷗沼海岸駅へ出た。ステンベルヒは大抵、日之出橋まで送って来て

くれたが、時には鵠沼銀座まで送って来て買い物をして帰ることもあった。店の人もなつかしがつて、『ステルン、ステルン』と呼ぶ。魚屋の小父さんや、八百屋の小母さんが『ステルン、古くなったな』などという『あまり古くて屑屋も買わない』などと日本語で冗談をとばしていた」（同）

高瀬笑子さんは、藤沢駅南口の高瀬通りを開拓した高瀬弥一の長女。津田塾女子大から東京大学を出て、米・ミネソタ大へ留学、そのまま同大学で教鞭をとり、同大東洋学部名誉教授になった人である。高瀬笑子さんが『鵠沼断想』に書いたこの文章が、これまで私たちが知り得た範囲内での、鵠沼のシュテルンベルクの様子を伝える唯一の文章だった。

シュテルンベルクが鵠沼へ来たのは、だれの世話によるものか。その点を笑子さんに問い合わせてみたが、すでに彼女自身にもよく分からない。東大でステルンベルクの教え子の一人であった父・高瀬弥一や田中耕太郎らがかかわったのではなかろうかと、笑子さんは推測された。弥一と田中はほぼ同じ時期に一高、東大での学生時代を過ごしている。さらにいえば鵠沼と縁が深かった哲学者和辻哲郎と高瀬弥一も一高、東大の同期だった。そればかりではなく弥一の妹照は和辻の妻である。また和辻と次に述べる画家岸田劉生とは、絵画を通して大変に仲のよい友人だった。シュテルンベルクと鵠沼の関係には、こうした人脈が深くかわっているようにも思われる。

シュテルンベルクが鵠沼に来たのは1918（大正7）年以降のことと思われる。東大をやめた後である。

シュテルンベルクの鵠沼での住まいについては地元の古老たちの記憶から、少なくとも二箇所が推定されている。一つは岸田劉生が住んだ貸別荘「松本陽松園」（通称松本別荘。現在の住所表示では鵠沼松が岡4-7）の一角である。別荘の経営者は東京で太物問屋を営んでいた松本直祐という人で、この人のご隠居の家が松本陽松園の奥にあった。シュステルンベルクはこの隠居宅に一時住んでいたという。もう一つの住居跡が鵠沼松が岡3-18近くである。

1918（大正7）年ごろの松本別荘といえば、劉生がこの内の一軒を借り受けて住み、生涯で最も華々しい活動していた時期である。「劉生の鵠沼時代」である。そこで彼の『劉生日記』に当たってみると、はたしてそこにはシュテルンベルクとの交流がはっきりと書かれていたのである。大正9年の時点でシュテルンベルクは42歳、劉生29歳である。『劉生日記』のシュテルンベルクにかかわる分を以

下に掲げる。劉生は「ステルンベルグ」「ステルンベルヒ」と表記している。

「（大正九年）

五月三十一日 ……電車に乗り新橋に行き五時四十五分の汽車にて帰る。汽車中ステルンベルグと知り合いになり話たるも、ドイツ式な面倒なる哲学にとらはれて居て芸術の事よく分からぬらし。

六月二五日 ……汽車の中ではステルンベルヒに会ふ。

七月二〇日 ……（午後四時半頃）海岸でステルンベルヒに会ふ。八時頃家に来ると云ふ。……夕食後九時近くなってステルンベルヒが来る。小説の話などしたが芸術の事はまるで分からぬらしい。しかしいい人間の様ではある。

七月二二日 ……椿と横堀と三人で海水浴に行く。ステルンベルヒに会ふ。借家の事でよわって居て少し気の毒だった。

九月二〇日 ……八時三十分の汽車で東京駅から帰る。……汽車中でステルンベルヒに会ふ。

十一月八日 ……八時三十五分の汽車で帰る。……汽車でステルンベルヒに会ふ。

（大正一〇年）

一月一二日 ……一時四十八分の汽車ステルンベルヒに会ふ。

二月一四日 ……藝椿の三人で上京十時五十二分の汽車也。ステルンベルヒに会ひ、宮中某重大事件のくわしい事をかへって外人の彼から聞く。山県が薩摩から婚嫁してゐる久邇宮をきらっての事だとか。ステルンベルヒ東京駅迄のりこす。

五月二七日 ……七時四十六分の汽車で帰る。空ははれて星が出てゐた。ステルンベルヒに会ひ鶴沼で道が悪いとて遠まわりしてステルンベルヒの家へより、女中が提灯をつけて松本の門まで送ってくれた。

（大正一一年）

五月八日 ……長与を送って帰って来たらステルンベルヒに会ったが女中の事をくどいてゐた。

五月九日 ○ステルンベルヒが一寸来た。二階でしばらく話して帰る。二人麗子をみて感心してゐた。（引用者注・ステルンベルヒの上半身スケッチ付）

七月一四日 ……今日は少しつかれてゐて写生に行くのはどうしようかと思ったが天気も晴れて来たので勇を出して出かける。描いてゐたらステルンベルヒがみて行く。

一二月一八日 ……長与立吉君、ステルンベルヒ等と同車也。」

◆ 異郷の死

シュテルンベルクは1950（昭和25）年4月17日に、東京・中落合の聖母病院で亡くなった。長男ローベルトが亡くなったのと同じ病院である。石川さんによれば、死因は腎不全。2日後の朝日新聞朝刊には「シュテルンベルヒ博士 幽門狭サクで去る3日以来東京目白の聖母病院に入院中だったが、17日午後9時45分死去した。72歳。ドイツ人で大正2年に東大に招かれて来日、わが法学界の恩人として田中最高裁判所長官ら多くの門弟を出した」とその訃報が載っている。ついに故国に容れられぬまま異郷での死であった。高瀬笑子さんによれば、シュテルンベルクの入院などについて、一切の面倒を見たのは田中耕太郎だった。千葉さんも「（田中は）藤沢市に生活保護と医療保護を受ける手配をし、彼の病気が進行すると費用を負担して目白の聖母病院へ入院させた」と書いている。

シュテルンベルクが亡くなった日、高瀬笑さんは全く偶然に病院へ見舞いに行く途中だった。たまたま新宿でその死を知り、そのため病院に行くことはとりやめたという。シュテルンベルクの没後、高瀬笑さんは朝日新聞の声欄に『ス博士の死』という投書をした。その投書は同年4月25日付朝刊に載っている。

「（博士は）教育界の功労者であったが、その晩年はみじめで、藤沢市の生活保護と医療保護をうけ、かろうじて命をつないでいる有り様だった」という書き出しで、日本にくる外国人教師の、とくに晩年の処遇改善について訴えている。

シュテルンベルクは、関東大震災も鶴沼時代に遭遇した。実際に遭った場所が鶴沼だったのかそれとも東京だったのかは分からないが、震災後も鶴沼に住み続けたのは事実である。戦争末期と戦後を辻堂で過ごしたこともはっきりしている。千葉さんの調べで、辻堂時代の住所は現在の辻堂東海岸1丁目の辻堂市民センター付近であることが分かった。シュテルンベルクは異郷で、しかも不遇な中で震災と戦災という二つの災害を耐えたことになる。

石川さんの調べで、シュテルンベルクは死に際して葬儀も埋葬も断わり、遺骨は散骨するよう命じたという。遺体は慶応病院で解剖に付された。したがって墓と呼べるものは存在しない。ドイツ出身の石川アンナさんは、『書斎の窓』の論稿の中で、シュテルンベルクは「数多くの善意の日本人に助けられた」と書いておられる。また死の三カ月前には、日本学士院の名誉会員に推戴されたという。シュテルンベルクの不遇だった生涯を思うと、この二つの事実は、鶴沼に関係する人間として、わずかに心を慰められる思いがする。

（完）

葛巻左登子さんを偲ぶ

葛巻左登子さんが平成11年11月11日、伯父・龍之介、兄・義敏をはじめ多くの近親者の方々の待つ地へ旅立たれました。お一人での生活が長かっただけに思い出話がはずんでいることでしょうか。

鵠沼を語る会、会員一同、心よりご冥福をお祈りいたします。

左登子さんが会員になられたのは会が発足後しばらくしてからと伺っています。以来、楚々としたお姿をほぼ例会ごとにお見受けしました。

芥川龍之介（伯父）、葛巻義敏（兄）、芥川多加志・比呂志・也寸志（いとこ）の身内としての話、交流のあった文人たちの話、そしてご自分が過ごされた大正・昭和期の東京や鵠沼一带のことを私たちに伝えて下さいました。

左登子さんがおひとりでしっかり守って来られた鵠沼の家も体力の衰えという健康上の理由で後にされ、病院、老人ホームでの生活が始まったことは75号でお知らせいたしました。

今回は会員以外の方でいろいろな形で親交を深めていらした四人の方々に左登子さんの思い出を綴っていただきました。

お人柄を偲ぶことができて何よりの供養になるかと存じます。

左登子さん本当にありがとうございました。

葛巻兄妹について

中島 舞子

大学在学中に葛巻兄妹と知り合う。

卒論は「芥川作品」 昭和32年生

もう二十年にもなります。私は細々と続けていた芥川研究のため、葛巻兄妹の家に入出入りしていました。今度はあれを聞こう、これもとメモまで用意しながら、次々と広がる話題に引き込まれ、帰途に着くのはいつも暗くなってからでした。

お二人きりの生活も、昭和四十三年の火災（義敏氏宅の）以来、もう十年にな



っていたという頃でした。義敏氏は元来体が弱い上、大やけどをし、ほとんど床を離れることはありませんでした。そんなお兄さんを左登子さんが一人でお世話をしていたのです。大柄な兄と小柄な妹。仲の良いお二人は、時には姉弟のようでもあり、母子のようでもありました。

タバコを吸わず、好きだったお酒もやめた義敏氏は、たっぷりとブランデーのしみ込んだサバランがお好きでした。それと好物といえば本郷の藤村の羊羹です。

「兄は黒いのは食べないのよ。甘味が強過ぎると言って・・。」と左登子さんは白い方をお求めでした。そんな神経質なところも、風貌同様、伯父龍之介に似ていらしたと思います。橋善の天ぷら、伊豆榮のうなぎ、何だか食べ物ばかりになりますが、本当に美味しいものをご馳走になりました。

確かに台風で倒れた母屋は無残なままでしたし、十分恵まれた生活ぶりとは言えないかもしれませんが、そこには静かで豊かな時が流れていたという気がしております。

「フランス語漬けで、日本語の発音が下手になった」という義敏氏の言葉は、時として左登子さんの通訳を必要としました。

「兄はあなたがお気に入りなのよ」と言っても下さいました。義敏氏は長岡輝子さんの大ファンで、ポッチャリ型の私は、こればかりは得をしました。

左登子さんの晩年は、文字通りお兄さんの手足となり、支える日々でした。「本当に御苦労さまでした」と頭を下げるばかりです。

「葛巻さんのおばさま」

寺内 佐恵子

鵜沼海岸3町目に在住。住いが葛巻さんの近くで生前親しい交際があった。

「ポンタちゃん、あなたとは、前世できっと親子だったのね。」といつもなついて寄って行く、我が家のヨーキー犬のポンタを抱きしめて、可愛がって下さいましたね。

お裁縫がお上手で、娘の七つのお祝着を縫って着付けて下さいました。もう随分昔のお話で、あの頃は皆、元気で楽しかったですね。

お家のお庭で、畑を耕していろいろなものをお作りになって、私が家庭菜園の種をおすそ分けすると、それを立派に丹精なさり、出来たものをよくいただきま

した。トマト、ナス、ほうれん草、いんげん等など……。ほうれん草などは種をお取りになって、翌年、出来た葉っぱを持って来て下さったのには驚いてしまいました。

お庭に生えた実生の木は、「折角生えて来たのに抜くのは可哀想だから・・」と皆、育てていらして満員状態でしたね。よく見物させていただきました。

高潔な御性格で、多少かたくななところがおありだったかも知れないけれど、私には良いおばあちゃまでした。

お使いの御用もさせていただき、時には郵便局のお使いもさせていただいて、私のことを、信用して下さったのかなと感謝しております。

葛巻さんには精神的にもいろいろなものを頂戴いたしました。

天国にひと足お先に逝ってしまったポンタには、お会いになりましたか？
安らかにお過ごし下さい。

ご近所の優しいおばさま。葛巻さんのおばちゃま。

思い出を沢山有難うございました。

鵠生園での葛巻さんの思い出

鈴木ひさ子

鵠生園 生活指導員

平成9年、桜が満開の時期に、葛巻さんが鵠生園に入所されました。入所してから三日後に姪の芥川さんが御夫婦で面会にいらっしゃいました。面会にいらしても葛巻さんはあまり喜ばれない様子でした。

鵠生園の入所当時、入浴がお嫌いで「心臓が悪いのでお医者さんにお風呂は止められています」と拒否され、職員達は足浴を試し、お風呂場を見学して頂き、お風呂場に慣れるように試みしました。職員の努力が実ったのは五月末でした。それから夏が来るまで拒否され、暑くなりようやく週に一度シャワー浴をなさいました。職員間でどうしたら、入浴していただけるかが問題になり、朝夕の申し送り度々話題になりましたが、最後は本人の意思を尊重しましょうと落ち着きました。

シーツ交換が済むまで、ホールで待っている時、特に入浴後は、洗い髪をアップにして、車椅子に掛けていらっしゃる姿はドキッとする美しさでした。

召し上がり物は、麺類がお好きで三度三度うどんでした。ある時、「カレーラ

イスならご飯の方がいいわよ」とおっしゃり、まぜご飯やお赤飯の時は他の利用者と同じものになりました。

月1回の懇談会、誕生会、雛祭りなど行事の時だけは離床いたしました。一人で居るのがお好きで、いつも、ベッドでカーテンを巡らしていました。食事をお持ちして帰るとき、カーテンをキチッと閉めましたところ、「そこは少し開けといて、ここを出入りする人を見るのも楽しいの」とのことでした。

個室が空き、お勧めしたところ「ひとりには嫌いですよ」ときっぱり断られました。カーテンを巡らしたベッドで、眼鏡もかけず、小さな文字でいつも何かを書いておりました。日記だったのでしょうか。

ご自分の持ち物はいつも身の回りに置いておきたい様子で、寝具や衣類を、洗濯に出した後は、物がなくなったと職員を困らせました。出来るだけ同じ模様のもを購入し、洗濯に出したのは忘れて頂くような方法を考えたりもしましたが、頭で考える程、簡単な事ではなく成果がありませんでした。

昨年四月末、好きだったおうどんも「これを食べると気持ちが悪くなる」とおっしゃってパンに代わり、五月半ば過ぎ胃の痛みを訴え、拒食になり、テレジア病院に入院いたしました。

葛巻左登子さんとその資料をめぐる人たち

細井 守

葛巻左登子さんの御永眠されたことを伺い、心よりご冥福をお祈りいたします。かつて、藤沢市文書館に在職していたおり、縁あって葛巻左登子さんに接し、またご所蔵の資料を市（文書館）に「葛巻文庫」としてご寄贈いただいた経緯からここに貴重な紙面をお借りすることになりました。

改めてなにかを文章にするというほどのことは持ち合わせておりませんが、私が葛巻さんと葛巻資料に関わらせていただいたなかで、少なからずサポートを得た三人の方を紹介させていただき、左登子さんへの追悼の文にかえさせていただきますと思います。

清水照信さん

私が左登子さんのお名前と存在を知ったのは、市広報課が1993年に制作し、藤沢ケーブルテレビで放映された「芥川龍之介と鵠沼」によってでした。

同作品の制作の過程で、当時、久しくおつき合いをいただき始めていた制作監督の清水照信さん（映像設計）から、再三、左登子さんの所蔵しておられる資料の貴重さを告げられました。後になって思い至ったのですが、当時は清水さんの言葉をいい加減に聞き流していたものでした。

その後、鶴沼を語る会の方々とご面識をいただき、地域の歴史・文化についていろいろとお話を伺っているなかで、突然のように左登子さんご自身とお持ちの資料の「存在の危機」についてご相談いただくことになったのでした。

当時の私は、文学資料＝二次資料という感覚で、若干敬遠していたというのが正直のところでしたが、いざ左登子さんのもとを訪れて、書簡や原稿など生資料（一次資料）を拝見したとたん、文書館員の性（サガ）とでもいうのでしょうかとにかく目の前にある資料を保護しなければという気持に駆り立てられました。時の高野修館長も意を同じくする文書館員気質の持主で、左登子さん所蔵の資料について、私が積極的に関わることを認め、援助して下さったことは幸いでした。

清水さんはその後も左登子さんについて、兄の義敏さんについて、そして左登子さんの所蔵しておられた龍之介資料について、お持ちの情報を積極的にご提供下さり、いろいろな面でサポートをいただき相談にもものっていただきました。

山田悦且さん

葛巻さんの所蔵資料を文書館に預かり、さてどんなふうに対処していこうかと考えていた時期に、これも何かの引き合わせでしょうか、当時朝日新聞湘南支局におられた山田悦且さんが足繁く文書館へ取材に来られるようになっていました。

山田さん自身歌人でもあり文学的素養の深い方で、藤沢にいるあいだに是非とも取材したい人として、歌人の川田（鈴鹿）俊子さんらとともに芥川龍之介の姪である葛巻左登子さんの名を当初から挙げられていました。

そうしたなかで、左登子さんの資料を文書館に預かることになったものですから、粘り強い取材が始まり、山梨の文学館や芥川の研究者への取材も経て、96年7月22日付の朝日新聞夕刊一面に「編集長は芥川龍之介少年く幻の手書き雑誌＞発見」というスクープ記事を掲載するに至ったのでした。

この記事の効果はてきめんで、なにせ朝日新聞の一面に藤沢市の話題が載った（それも良いことで）ということで、文書館が地域の資料を積極的に活動していることを市の上層部をはじめ内外に知らしめることにもなり、葛巻資料の保護・保存のための予算の措置に対しても話がとうりやすくなりました。

山田さんの取材目的がこのスcoopのためだけだったならば、一新聞記者として評価するのみですが、その裏には資料を持ち続けてこられた左登子さんに対する真摯な賞賛の気持が感ぜられ、私は今でも、あの時あの場所に山田さんが居られたことに感謝しております。

櫟原直樹さん

藤沢市文書館が葛巻資料を受け入れたのは、96年5月でしたが、その4月に文書館の専門員嘱託として任用されていたのが、櫟原直樹さんでした。

櫟原さんは近代史の研究者で近代文学にも明るく、任用当初の業務計画を一部変更して葛巻資料の整理担当として腕をふるってもらうことになりました。

彼は持ち前の緻密な性格で、書籍・書簡・原稿から絵画に至るまで、さまざまな資料の分野に分け入り、資料群の全体把握に努力しました。一方、各地の文学館を訪れての調査や関係文献の渉猟にもエネルギーを割き、資料を永く保存するための基礎的な措置にも心を配ってくれました。

1996年11月には彼を中心に、文書館で「葛巻文庫と芥川資料展」を開催し多くの観覧者を迎え、先の新聞報道と併せて、埋もれていた資料に脚光を浴びせることができました。期間中に当時、老人健康施設に入っていた左登子さんを展示会場にお招きすることもできました。

残念ながら櫟原さんは1998年9月に一身上の都合で文書館を去ることになり、その業務を完成することはできませんでしたが、「葛巻文庫」が今あることの大きな力であったことは確かです。

ここに挙げた三人の他にも、鶴沼を語る会の皆さまはもちろん、多くの方の助けと熱意によって、今、藤沢文書館に「葛巻文庫」があります。

資料が多岐にわたることやプライバシーの問題などもあり、未だ目録の公刊は出来ていませんが、館を訪ねてお申し出いただければ資料の利用は可能ですので（ものによってはマイクロ写真による利用）どうぞ訪ねてみて下さい。

こうして記してきましたように、私と葛巻左登子さんとの関わりのあった時期は偶然に知己に恵まれ豊かな回想として私のなかにあります。

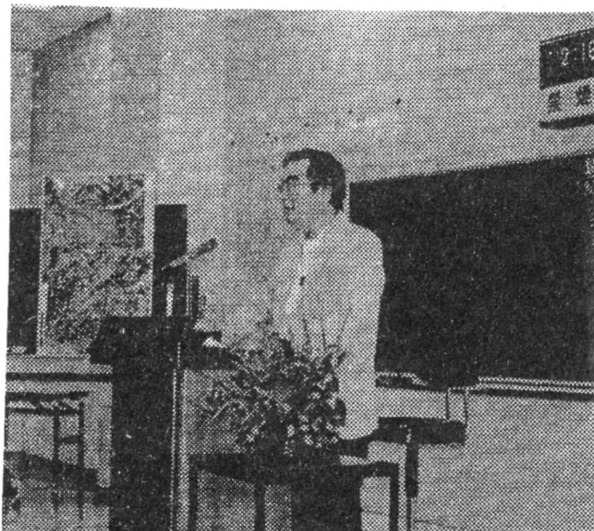
左登子さんにとっても、この間のこの事が、一瞬でも幸せな記憶としてあったろうことを念じてやみません。

講師 葉山 峻氏

講演会場 鵜沼公民館

講演日 1999年9月23日

国会開催中は私は高輪のプリンスの隣が衆議院の宿舎になっておりまして、そちらのほうに行っておりまして、ご無沙汰を続けておるわけでございます。今休会中でございますし、有田さんのほうから「鵜沼を語る会」で何か話してほしい、特に海岸のほうは大分やったから、本村のほうを中心として話してほしいというお話がございましたので、快くお引き受けさせていただきました。今日はお忙しい中をお集まりいただきまして、大変懐かしい皆様のお顔にお目にかかることができた、そしてまたこういう意義ある会においてお話をさせていただきますことを大変うれしく思っております。本当にありがとうございます。



郷土史の話と申しますが、私は郷土史研究家でもございせんし、しかも記憶はもうずいぶん前のこと、戦争が始まる前の頃からの話でございますから、大分記憶違いなどもあるのではないかと、そういう点はまたいろいろこれからこういう会を通じることによって間違いを正し、鵜沼の歴史を正しく豊富にしていくということのお役の一環を担わしていただければ大変うれしく思います。私のお話は大変つたない話でございますのでこれからの時間、多少「つまらないな」と思われる方もいらっしゃると思いますが、その辺はお許しをいただきたいと思います。

鵠沼小学校時代のこと

今日の話の中心は私の小学校時代の話、特に学び舎は鵠沼小学校でございまして、そこでちょうど戦争が始まり空襲も激しくなり、終戦を迎えるという昭和15年から20年の六年間に小学校生活を送ったわけございまして、その頃の鵠沼の話をしていただきたい、こういうふうに思っております。

ご承知の通り私が小学校一年になりましたのは昭和15年、西暦で言うと1940年、その入学した年がまさに皇紀2600年、今の人にはわからないかもしれませんが、「紀元は2600年」という歌が毎日ラジオから流れていたときであります。私と同じ年配の方は覚えておられると思いますが……。その歌を歌ってみます。金鵒勲章という立派な勲章がありましたけれど、「金鵒」という煙草もあったんです、いまでいう「ゴールデンバット」です。その金鵒輝くという歌詞から始まる歌であります。

金鵒輝く日本の
栄えある光身に受けて
よくこそ来たれこの朝^{あした}
紀元は二千六百年
ああ一億の胸は鳴る

というような歌でありました。しかし子供というのはどういうわけかそういったきちんとした歌よりも、おもしろい歌を覚えるものでございまして、どこからどう流行って来たのかは私にはわかりませんが、これをお囃子みたいに子供たちがみんな歌ったもじった替え歌がございます。なにも私が親から教わったわけではございまして、どっからか流れてきて覚えた歌であります。ちょうどその年だから、前の年だから知りませんけれども、煙草の値上げというものがあつたようですね。それで「金鵒」という今でいう「ゴールデンバット」これは安くて15銭。そして「光」というのがありました、ちょっとニコチンが強い煙草でありまして、これはこの間まで売っていましたがそれが20銭。それから「鳳翼^{ほうよく}」というきざみ煙草、煙管で吸うやつですが、これが25銭。そして「みのる」というのがやはりきざみでありまして、これは高くて1円。そういうような時でありまして、

それをもじった歌でありますが、庶民の煙草好きの人の「値上げはいやだなあ」という思いが、今から考えるとこもっている歌であります。

「金鶏」輝く15銭

栄えある「光」20銭

よくこそ「鳳翼」25銭

「みのる」はあがって1円だ

ああ、煙草の値は上がる

失礼しました。まあそういう年だったんです。それが昭和15年という年で私が鵠沼小学校、当時は鵠沼尋常小学校といいましたが、その一年に入学したわけです。その年は紀元2600年だけではなくて、我が藤沢町が藤沢市になった、そういう市政施行の記念すべき年でもありました。そういう行事もあったように覚えております。きちんとした校服を着て、青い上っ張りを着て、校門を入っていきました。校門を入りますと、鵠沼小学校というのは北側に向かってちょうど「コの字型」に校舎が建っていました。講堂などというのはもちろんありませんから三教室をぶち抜いて講堂の代わりにしていました。校門を入れてすぐ左のところに奉安殿というのがありました。式典とかお祝いというときには、校長先生がその奉安殿の中からうやうやしく箱に入った、桐の箱だったと思いますが、奉書を取り出して、紫の袱紗を取りましてそして「朕思うに我が皇祖皇宗国を始むること高遠に……」「父母に孝に、兄弟に友に……」という教育勅語を朗読されて、ということでありました。したがって生徒は一年生の時から校門を入ると「奉安殿に最敬礼」と言って最敬礼をしてから各自のクラスに入っていく、そういう学校でありました。

1年生は3クラスありまして、桜組、桃組、梅組というふうになっていました。これが地域編成みたいな形になっていました。桜組というのは海岸ですね、東海岸、西海岸といろいろあったんですが、当時は「お別荘」といわれていた地域、そこが桜組だったと思います。私も親戚が海岸にいたものですから、その斎藤秀彦ちゃんの隣がいい、などという話もあって桜組になりました。桃組というのは荻田とか中東とか鵠沼でいえば中間の地域でした。そして梅組というのは宮ノ前とか上村というところの生徒、そういう三つの地域別の編成になっておりました。

私たちの桜組の先生は当時の鵠沼小学校で女子の先生も受け持ちはこの方だけだったんですが、今辻堂にお住まいの森せつ先生でした。もう大分ご高齢ですがお元気だそうです。この森先生は大変やさしい、よい先生で、この方が1年の受け持ちでした。そして2年の年は池田良助先生で、その後藤沢市の教育委員会の学校教育課長を長く勤められた方でありまして、大変達筆の方でありました。私が今でもたいしたものだと思うのは、ちょうど「川上の本屋さん」から新しい教科書が届きますと、それに筆で葉山峻なら葉山峻と、今度受け持ちになる生徒の名前を教科書の裏表紙にクラス全員に書いてくださったものでした。まあ、立派ないい字だなあと思ったものです。先生としてはこれから受け持ちになる生徒はちゃんと覚えておこう、という必要はあったと思いますが、それほど心配りのあるいい先生だったなあ、と今でもその見事な字とともに思い出します。その池田先生のときの12月8日に真珠湾攻撃があり太平洋戦争が始まった年でした。その時ちょうどそのクラスは朝、芋掘りに行っていたんです。当時鵠沼小学校の北側はずっと芋畑になっていまして、今は日本精工の塀の中になってしまいましたが、そこに土俵があったのを覚えています。そこに芋掘りに行っていたわけですが、リヤカーに芋を積んで学校へ帰ってきたら、朝礼みたいなものがあって校長先生が集まるようにということでお話があって「真珠湾を攻撃して戦争が始まった」という話があったことを今でも記憶しております。

3年生、昭和17年になりますが、今度は男と女の子は「男女席を同じうせず」ということで分離されまして、男組、男女組、女組と分かれまして、残念ながら私は男組になりました。その時の受け持ちの先生は関根正典先生という、鵠沼神明社の神主さんでした。その後鵠沼小学校の校長先生などをお勤めになった方です。今はお宅におられます。その先生はなかなかひょうきんな、おもしろい先生で年中唱歌ばかりでした。あのころは音楽と呼ぶような授業はなくて、オルガンは鵠小あたりでは確か一台しかなかったように思います。そのオルガンを生徒が運びに行つてそして先生の前に据える、そうすると“たんき、ぽんき、たんころりん”とかおもしろい歌をひょうきんに弾いてくださいます。生徒はそれがおもしろくて、歌ばかり、学校へ行くのは歌ばかり、まさに歌を唱えるという唱歌、これで楽しい授業を送りました。私などは当時級長をさせられていたのでありますが、お調子者でありますから、机のふたを取つて“たんき、ぽんき、たんころりん”と始まると机のふたで拍子を取っておりまして、そしたらそのうち

クラスがシーンとなってしまいうんですね。何だと思って気が付くと後ろに恐い校長先生が立っておられて、いきなりつまみ出されて校長室のところに立たされた、などということもありました。ともあれ、非常に楽しい先生でした。それともう一つ先生は鵜沼の元ともいえる、神主さんだったこともあり郷土史には関心の深い方でした。教室の後ろに先生の手書きの絵がありました。そこで「鵜沼というのは昔は沼が多くて白鳥がすいすいと泳いでいる」という絵を上手に描いてくださいました。「くぐいぬま」と呼ばれていたということ、この「鵜沼を語る会」でも鵜沼論議がよく出ているようでありますが、「くぐい」というのは今で言う白鳥なんだろうが、まあこのごろは飛んできませんが、同じような名前は石川県とか日本の各地にそういう名前が残っているということが記録されています。そういうことを初めて教えていただいたのは関根正典先生だったと思います。

4年生は富沢先生で、この先生もいい先生でした。その後結婚されて原先生と名前が変わられました。私が国会に行ってからこの藤沢の北の大和のほうから選出された、地主さんで富沢さんという人から「その先生は叔父さんなんだ」という話を立ち話で伺いました。埼玉のほうの方と結婚されて原先生と名前が変わりまして、途中で出征されまして、私たちはいい先生だったので悲しくて仕方ない毎日を送ったものでした。この先生は今でもご存命で、何年か前に私が市長時代に訪ねて来られまして、いろいろ昔話をして非常に懐かしかったわけがあります。この先生が4年と5年の途中まで、そして先生が出征されたので、当時男の先生はどんどん出征したのです。そして代用教員といいまして、中学とか藤沢女学校ですか、そういう方々が代わりに小学校の教員に来てくださったのです。竹村先生、今は本宮先生という方は非常に美しい、それに歩くときも非常に嬉しそうにスプリングのように弾む足取りで歩かれる颯爽とした先生で、みんなの憧れの的、生徒もそうだったし、おそらく職員室の若い先生にとっても憧れの的だったんじゃないかと想像しております。富沢先生の代わりには大沼先生という、湘南高校の先輩でそちらから来られた先生、この先生は地図がすごくうまかったです。湘南中学時代から高校にかけて香川幹一先生という地理の先生がおられて、私たちも中学1年か2年頃まで授業を受けたのですが、この先生はそれで地図をすらすらと上手に描くかたで、その先生の教育、薫陶を受けたせいか、大沼先生は地図が上手でした。今でも思い出すのは、例えば関東地方などというののもちゃんと

描き方を教えてくれました。こういうふうにして（黒板に描く）これが相模湾で……。あまりうまくいきませんでした、失礼しました。そういうのを丹念に教えてくださった先生だったと記憶に残っています。

6年になりますと、というより5年生くらいの時から空襲が始まりました。私が初めて警戒警報というサイレンを聞いたり、空襲があったということを聞いたのは昭和17年の秋のことでした。私の家のお手伝いさんでおさよさんという人がいまして、この方は津軽の奥の方で太宰治の金木というところの奥の農村で生まれた方でしたが、不幸なことに当時農村が大変疲弊しておりまして、藤沢に来ておられました。その方をとこばの亀ちゃんという床屋さんが見初めまして、いっしょにうちの屋敷の中に住まわれていて、私の子供の頃抱いてくれたり、いろいろ面倒を見てくれたのがそのおさよさんでした。非常に几帳面なおばさんでした。そのおさよさんの故郷である津軽へ行こう、りんごが食えるからということになりました。ちょうど東北線の白河の関のあたりで空襲警報が鳴って汽車が長い間ストップしました。あとで聞いたんですがその時にアメリカの爆撃機が東京を飛んで、初めて爆撃をして、その後中国へ飛んでいって着陸したそうではありますが、それが本土への最初の空襲であったわけです。その時小学校3年生でしたが、青森まで行ってりんごと、そのころご飯のことをしゃりと言ったんですがその白米はその頃では食べられなくて、全部まぜご飯であったわけですから、お腹いっぱい銀しゃりを食べたこと、そして津軽の田舎で秋を過ごしたことは今でも懐かしい思い出であります。

その前にもみちゃんというお手伝いさんがおりまして、その人は宮城県の石巻の人で、そこに夏休みに行ってひと夏、入り江で泳いで遊んだ記憶があります。それも楽しい思い出であります。私は子供はやはり田舎で育てた方がいいな、という思いが強くありますのは鵜沼をふくめてそういう時の記憶によるものだと思います。田舎というのはさまざまなことがあって、ロマンがありますから子供がそこで伸び伸び育つということはどんなに幸せだろうと今でも思っております。

私が市長になりましてから、全国でも例のない「緑の広場」という制度を作りました。まあ市もお金が無いですから結局借り受け制度になったわけですが、市内で百数十箇所そういう「緑の広場」というのを作ったのは、そういう原っぱ、子供の遊び場、そこで夕暮れまで遊んで帰ってくるとお母さんから怒られるという、そのように子供は伸び伸びとそういう原っぱで遊ぶことがいいことだという

思いがありまして、何とかこういう土地開発の中でも確保したいということで「緑の広場」制度という施策を行ったわけです。以前この場所で村川賢太郎先生のお嬢さんの村川夏子さんが「我が家の緑はなぜ残ったか」というお話をされたようではありますが、あれなども村川先生のお屋敷をそういうかたちで松を残し、古い桃畑を残し、そういう形で現在も残っているということでもあります。少子化ということで子供の数も少なくなるなかで、またパソコンとかいろいろ子供が一人の部屋に閉じこもりがちであるというようなことで子供同士の遊びの形が時代とともに大きく変わってしまったこともあり、その遊び場を利用するという形にどこまでなっているかということはなかなか問題があろうかと思います。

とにかく私自身あまり勉強はしなかった方で、勉強というのはそもそも学校でするものだと思っていました。ですから家に帰ったらほとんど遊びだけです。それはもう鬼ごっこをしたりいろいろな遊びをしたものです。のちほど詳しく申し上げますが、季節とともにたくさんの遊びがありました。その中での子供の交流というかそういうものがありました、今の子供の遊び仲間というのは、私の子供たちは鵠南小学校でしたがその子供たちにも言えることですが、その学年だけです。ですが昔は縦社会というか、上まで友達の範囲が広がってありました。その頃つくづく思ったんですが、私の子供の頃にあった“ガキ大将世界”といいますが、そういう世界は崩壊したんだなあ、と思ったわけです。先ほどのお話に戻しまして、結論を申しますと、やはり子供は田舎のほうがうまが合っているように思えまして、そこで育てるのが一番いいんじゃないかなと今でも思っております。友達もすごく豊富になるのです。私事で恐縮なんですが、娘が生まれ、その後に長男が生まれ、それがいざ小学校へ行こうという段階になりまして私は初めて家内と本格的な夫婦喧嘩というものをいたしました。それというのは家内は東京のある有名な私立高校の付属を受けさせてそこに入れたいと言っていました。家内としてはそこを本当にいい学校と思っていたようでして、そこに家の子供を行かせたいという思いがあったのだと思います。私は「バカ言うな」と、やはり子供は地域で育てて地域の小学校へ行って、そこでの友達が木工さんの息子であったり、左官屋さんの息子であったり、農家の息子であったり、いろいろな友達がいてそういうなかで子供が育った方がいいんだと、私自身、今でもそのことで人生が幸せだと思っていますが、なにも混んだ電車に乗って東京まで通わせる必要が無いということでかなり深刻な夫婦喧嘩をしたことがございました。と

もあれ私自身がこの鵠沼で小学校に通った思いでとともに、子供が自然との共存の中で、地域社会の子供たちとみんなと交わりながら育っていくのがいいのではないかと考えております。こちらの会誌「鵠沼」に時々書かれている、私の家の隣にお住まいだった若尾肇さん、このかたのお話は「昔の鵠沼というのは最高によかった」とおっしゃられていて、確かにそのとおりなのですが、なかなか時代というのはそうもいきませんから、いろいろな工夫をして子供たちが自然との共存の中でどのように育っていくかということについては、これからの大人がもっともって考えていきたいと思うわけです。このようなことが鵠沼小学校時代6年間の思い出でございます。

6年の時には空襲がものすごくなりまして、毎日警戒警報が朝、それもちやんと8時でしたかびびたと鳴り始めるのです。サイレンが鳴るんですが、今でも火事やなにかでサイレンの音を聞きますと私は何か不気味な思いがするわけであります。それは私が子供の聞いた警戒警報発令、空襲警報というのはサイレンなんて鳴らなかったです、毎日来ましたから。警戒警報でサイレンが鳴ります、大体子供というのはぎりぎりまで学校に行きません。私の家にはおじいさんが植えた椎の木が3千本くらいありました。自分の子供が外交官にでもなったら、この椎の木を一本ずつ売っていっても一生食えるといって植えた、という話が伝わっております。まあ実際にはそういう話にはならなかったわけではありますが。ともあれ我が家は堀川というか、鵠沼中の子供たちの別天地みたいなところであったわけです。そこで椎の実をとったり、登校前にはターザン遊びとか、藤のつるを吊るして木から木へ渡り歩く、いろいろの遊びを学校が始まる直前までやっていました。そろそろ時間だということになって、学校へ向かいます。空襲の時代ですから、クラスの中で各地域別に「何分団の何班」というように地域的に編成されました。こういう吹き流しのような旗、竿が付いていまして、富士山の絵がかいてあり、当時鵠沼小学校は鵠沼第三でしたから三と書いてあり、これで3分団6班ということであります。上級生から下級生までこの旗で登校します。集団で登校して校門へ行くと門衛が立っています。そこへ行くと「歩調揃え」と言って敬礼をするわけです。私もその門衛をやったことがありまして、同級生でインキョ屋（隠居屋）という屋号の渡辺君と二人で立っています。「よし」と言いますと校門を通れるわけです。渡辺君はかけっこの大変早い男でしたが、6年生くらいになりますと多少女の子を意識しはじめまして、ちょっと好きな子がいたんで

すね。私も茶目っ気がありますから、彼がその子を好きだったと知っていますから、女の子の集団が来ましてその子なんかいいですよ、と、「やりなおし」と言うので入れないんです。いけなかったとは思いますが……。鶴沼小学校を入ってくるところで二三回「やりなおし」と言うんです。今では塀がありますけれども、そのころは植え込みがあつて、ちょっと高くなっているところから自由にみんな入れるんですよ、学校へ行くのに。私は今どうしてああゆうふうコンクリートの塀で囲ってしまったのか、昔の鶴沼小学校のような方がいい、と思うわけでありましたが。そのすきまから女の子達は入っていった米田先生という女の子をかわいがってる先生がおられまして、そこへ言いつけ口をした、そこで私たちはまた怒られた、とこういう思い出があります。

そういうふうに入団6班ということで入っていったわけです。ところが毎日空襲ですから、今日も空襲だろう、警戒警報のサイレンが鳴るだろうと思って遊んでると、どうもなかなか鳴らない、「それじゃ行こう」ということになり、皆で木登りをやめて途中の「火車のお墓」というところ、昔は水力でなくて電気で精米や麦の脱穀をする宮崎さんという精米所があつて、そちらのお墓が通道でした。そのあたりまでいくと「ウーウー」とサイレンが鳴る音、「鳴ったー」ということで「今日は学校休みだ」と皆散るようにしてまた椎の木に登る、というのが戦争末期の姿でありました。先生も最後は生徒が学校に来られないということで、私のところやそういうところにほうぼう集まって上級生に教えさせるようにさせていました。それとクラスがあふれてしまいましたね。戦争末期になると東京や横浜の方から鶴沼の親戚を頼って皆さんが縁故疎開して来られて、その子供たちがあふれかえってしまいました。いま40人以下学級とか言っておりますが、100人以上で一クラスというようなものでした。それも男の先生は皆出征してしまって女性の先生ばかりになってしまいました。ですからあのころの先生も大変だったと思います。そういうことが5年、6年の時代でした。

8月15日に終戦になりました。ちょうど一月前くらいに艦載機というのが毎日来ていました。私の家がこんもり森になっているように上から見えたので、何かあるなと思ったんでしょうか、なぜかよくわかりませんが、私の家だけ海の方へ向かっている艦載機でしたが、7月30日の日に爆弾を落とされました。家の屋敷の中に30人以上の人がいたのですが、死者はもちろんほとんど怪我人も、爆風で割れたガラスでかすり傷を受けた人はいましたけれども、出なかったとい

うことは幸いなことでした。それから間もなく終戦ということになります。

「忍び難きを忍び、耐え難きを耐え.....」という玉音放送がありました。我が家のこわれたラジオで聞いたわけです。最初は何のことやらわかりません。すると親父が「戦争はもう負けたんだよ」とポツツリ言いました。それからマッカーサーが藤沢の北側にある厚木の飛行場にパイプを持って降り立って、それから横浜に行くと新聞に載っていました。私の記憶としては、その頃「機動部隊が来たぞー」と言うのですとんで海岸に行きまして、鵠沼橋のもうちょっと向こうの砂山から見ました。航空母艦とか、戦艦、駆逐艦、巡洋艦とか、さしもの広い相模湾を覆い隠すように敵機動部隊が並んでいるんです。それはもう圧倒するような姿でありました。そして夜はイルミネーションが輝いて、一つの大きなデモンストレーションだったと思いますが、そういうことがすごく印象的でした。阿部昭さんの表現によれば「血なまぐさい船体をさらして」江ノ島のほうから伊豆半島まで、圧倒的に相模湾を埋め尽くしていた、というそれが強烈な印象であります。

それからしばらくのことですが、砂というのはすごいですね、砂山が移動しちゃうんです。遊歩道路、今の134号線、あれは今は大磯の方まで通じておりますが、あのころ辻堂の演習場のところは昭和25年頃まで日本に返還されませんでした。ですからいったん浜見山のほうへまわって茅ヶ崎に出なければいけないわけでした。とにかくその遊歩道路が砂の山になってしまいました。車なんかは通れないです。「これはなんとかしなければいけない」ということで、子供らしい正義感でしょうか3分団6班を集めて「みんなスコップを持ってこい、これをどけんべ」と言って、皆で一生懸命砂山を横の松林のほうに片づけて、かろうじてコンクリートが見えるようにしました。翌日「どうなっかな」と思って自転車を飛ばして言ってみると一夜のうちに砂山になってしまっていました。はかない子供たちの努力でありました。この頃は言うなれば無政府状態になっていましたから、どこの家も薪たきぎには困っていたのです。そういうところから防砂林という松林を切っちゃって薪にしちゃったんです。それであつという間に砂山が移動してくるのです。砂の力はすごいものだなあと思いました。それからしばらくして占領軍が来まして、あつという間にブルドーザーできれいにしてしまい、「やあアメリカというのはすごいなあ」と子供心に思ったものでした。これも小学校6年の時でした。

そういう時期でも「受験はしなきゃいけない」と先生が言いまして、クラスの

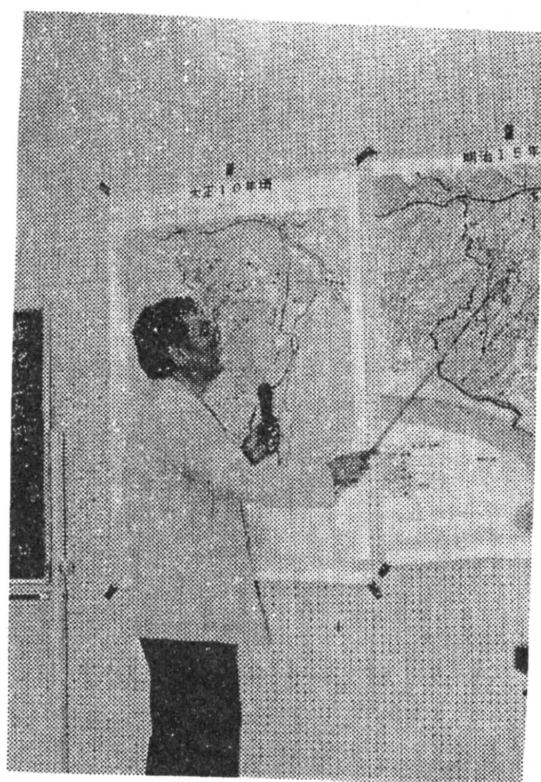
子供たちをいくつかに編成しまして子供同士で勉強させる、ということで中学の受験勉強に入っていました。あのころの中学はそんなに難しくなかったんでしょね、私たちは志望者全員が入れました。今ならとても私なども入れないと思いますけれども、あまり勉強しないで中学に入れたというのが6年生の思い出でございます。

そういう6年間ですが、懐かしい、楽しい思い出を作ることができました。

鵜沼というのはいいいところで子供たちには別天地でした。烏森、皇太神宮これが鵜沼の中心です。北側の集落、これが引地^{ひきち}です。そして上村^{かみむら}です。そして宮ノ前、これが皇太神宮の真ん前です。それから宿庭、清水、荊田、原、堀川というふうになっています。東の方では大東、仲東それから新田、花沢町、石上。それから鵜沼海岸、これは西海岸と東海岸とありまして、これらが鵜沼小学校の学区でありました。

私が小学校に入りました頃、北部の宮ノ前や上村の友達の話聞きますと、その頃引地川の改修工事が進んでおりまして、改修工事をするたびき大きな鯉がとれたとか聞いておりまして、その頃までこの工事が続いていたように思います。引地川の蛇行というか、流れが変わっていったんです。今大平橋というのがありますがそのあたりから急に西に折れ曲がっておりました。今ヴィラ・ウィスタリアという新しいマンションが砂山の上に建っておりますが、その辺まで曲がっていたわけです。そして今の辻堂小学校のあたりから伏見稲荷の裏手、日の出橋のところまで来まして、今の雅叙園の近所から海へ出ていました。それは今でも片帆橋などもあり、かすかにその名残があるわけです。そこでは古い川のあとは下水になり、それだけ道が広がって変わってしまいました。

有田さんからのお電話で「明治館の話しをしてほしい」とのことでありました。明治館というのは今の太田橋のたもとのほうにあったようです。これには説がいろいろあるようですが、相沢君という私の同級生がいますが、関東特殊に勤めておられますが、この相沢君の曾おじいさんが明治館の管理みたいなことをして薦をやっていたんだという話をおととい、にわか勉強ですが、話を聞いたんです。そういうようないきさつもあって、堀川の人々は明治館というと相沢、相沢の屋号みたいなものになっていました。屋号というのがあります。私のところは「又兵衛さん」だし、堀川でも「あらや」だとか「にいや」だとか浅場さんの関係は



そういう屋号で呼びます。それから「けろさま」とかいう屋号もあって屋号で呼び合うわけですが、相沢君のところは「明治館」と呼んでいます。どこにあったんだ、という話ですが、大平橋という橋があります。そこから坂を上っていくわけですが、そこに八百屋さんがいます。その近所が相沢君の家ですが、「川は俺のところを通っていた、それで砂山の方へ行っていた」と。それで明治館というのは今の八百屋さんあたりだったとのこと。これにはいろいろ説があるようで先ほど川上会長さんから伺ったと

ころによると「もっと山の上のほうだった」と。とにかくここは有名な旅館でした。東屋ができる前、この明治館と^{こうしょう}鶴沼館というのがあったようです。年代などにつきましてはこれからさらに「鶴沼を語る会」で研究されることと思います。かなり有名な方もいっぱい泊まれた旅館だったそうで、相沢君の兄さんなどは明治天皇の菊のご紋章のついた盃を持っているという話などもありました。相沢君の親父さんは鳶の職人さんでした。その大平橋の上に堰^{せき}といって、堀川田を潤すため引地川を止める堰があり、板を二枚ずつドーンドーンと流れに落としてせき止めていたんです。私が市会議員をやっていたときに川上会長のお兄さんからご本をいただいて、明治館の話が出ておったと記憶しております。こちらに何う前に本箱を探したんですが見つかりませんので、今度川上さんにそういうお話をしていただいたら明治館のこともわかってくるのではないかと思います。

鶴沼の子供達の生活と遊び

それではこれから鶴沼の子供たちの生活について話をさせていただきます。最

初は暮れからお正月にかけてなのですが、よく他の地区の話などを聞くと「お正月のたこあげ」などといいますが、私たちはお正月にたこあげをした記憶がありません。風の向きが海の方から吹いてくるのが5月なんじゃないですか。だからたこあげというと5月、という印象があります。ですから暮れからお正月という、だいたい^{こま}独楽です。独楽を当てっこするんです。しかし都会の子供たちがよくベーゴマ、ベーゴマと言いますが「ベーゴマ遊び」というのをしていたようです。この間堀川の人とお話したときだれもが「できない」というんですね。私もできません。都会は狭いからああいふ金だらいなどを使うようなそういう遊びが発達したのではないかと思います。我々の場合は「大山独楽」といわれるもので、白と赤と青で同心円状に塗られたかなり大きいものでした。あるいは手作りみたいな感じで、よくおこづかいを握って「片瀬独楽」これは龍口寺の近所、片瀬の^{とわらじょう}通町あたりで屋台みたいなかたちで工場があり、そこに買いに行きました。「おじさん、これで作ってくれ」と言って作ってもらいます。それを持っているとかっこいいんですね。それでまた心棒がけやきやなんかだと、大庭の方まで探しに行っかしの木の枝を切ってきて自分で心棒をけずって作ります。最後はガラスを使い、ペーパーを使って、なかなかこの心棒を出すのが難しかったのです。それでまた、かしの芯だということとまたかっこうよかったんです。そのように独楽を暮れからお正月にかけては特に暮れですが、よくやったように思います。それは農家が例えば板橋さん、板橋さんのところなどは^{いろ}筵を使っていろいろなものを干したり、農作業するのに屋敷の中に広い広場があったんです。ですからそこで独楽を回しました。これはあまりいい話ではないのですが、誰かが^いびか^いびかの独楽を買ってくると皆でそれを目の敵にしまして、それで「がんにゅう」というのがありまして、独楽をぶつけるんです。置いてある独楽に思い切り当てていくんです。当たればOKということになるのです。農家の隅に物置みたいのがあって、トイレがあるんです。トイレなどというと聞こえがいいであうが「肥っため」と僕は呼んでいました。その周りは囲いがいいんです、かめが^いけてあるだけです。そこに独楽を落とすんです。新しい独楽を落とされた子は泣いちゃうとかね。そういう遊びをよくやりました。がんにゅうをして独楽がころころと止まってしまったら負けですし、それで最後まで打ち勝ってしかも寿命が、回っている寿命が長いのが勝ち、というのが独楽回しです。これはよくやりました。

それからお正月に我が家でよくやったのはトランプとか花札とか「出たか坊

主」などと言ってこれは親父のほうが得意でした。ときどきいんちきをやられまして、子供が悔しがるのを楽しんでいたようなところもありました、おふくろの方は京都というか関西の出だったので少し品がよくて百人一首なんかをやっていて、小学校のころから「むすめふさほせ」などという百人一首をやりました。おふくろの兄弟のところもやっていました。

お正月が明ける頃、楽しかったのは15日の日に「どんど焼き」というのがあります。宮中の行事では左義長さぎちやうと言うのですか。結局集落のはずれみたいなところに「どうろくじんさま」というのがありまして、多分隣との境に道祖神というのがあったんでしょう。私たちの町内の場合は今の「太陽の家入口」から大平橋の方に行きますと、上流の堰というのがあって、そこから堀っこが伏見稲荷の方へ堀川田に水を供給している、その堀っことの交点のところに「どうろくじんさま」とよんでいた道祖神が立っていました。そこへみんな書き初めとか、しめ縄とか、門松とかそういうお正月のものを持って行って焼きます。その時お米の粉を餅にして団子にしてそれを木の枝に刺して火にかざして焼きます。それを食べると一年間病気をしないという、それが1月15日の行事でありまして、子供も非常に楽しかったということでございます。

2月になりますと稲荷講というのがありました。私の家の中にも、今はちよつと外へ出ておりますが、お稲荷さんがありました。稲荷講ということで、ちょうど農閑期ですから皆その時集まるんです。大人たちはそこでぬたを作ったりしながら、いろいろ話し合って夜を過します。昔の人は子供たちのことをよく考えていたんですね。だから紅白のおむすびを必ず麴こうじ蓋にいっぱい作りまして、それを子供たちに配ったりキャラメルを配った、それが子供たちにとって大変楽しいものでした。それでお稲荷さんに油揚げをあげたりという稲荷講というのがありました。大体町内の選挙というのは、町内会長とか消防担当とか一年の役を大体その稲荷講の場で決めるというならわしであつたと思います。

2月から3月にかけては、雪が降ったときですね。雪だ、というと子供たちはうれしい気分になりますが、親父なんかも昔から雪のときは「鳥だ」と思うんでしょう。雪が降りますとお父さんが「峻坊早く“きんちゃんみせ”へ行つてこい」と言います。「きんちゃんみせ」というのは鵠沼小学校の側にあつたのです。竹内酒屋さんのもうちよつと先に今でも酒屋さんがありますけれど、そこでたこなんかも昔は売っていたようですが、そこでとりもちを売っていました。「それを

買ってこい」というんです。親父は裏の竹藪で竹を切りまして、それをひごにする、小刀で割いてひごを作っています。とりもちを買ってくるとそのとりもちを、鵜沼言葉で「なびる」とあまり品のいい言葉ではありませんが、ひごになびりまして田圃に出かけます。田圃に広い畦があります。その雪をどけてそこにとりもちを仕掛けるんです。すると上の方で雪でえさがありませんから鳥が群がっているんです。ひよどりだとかスズメだとか。それで黄色いものを見つけるとばあっと降りてきて、それをかたっぱしから捕まえます。それで首をひねって、鳥をむしゃむしゃ食べるというのが楽しいものでした。まあ鳥に関して言うと、もうひとつ楽しかったのは、藤沢の魚万の前あたりに武蔵屋という小鳥屋さんがありました。そこでかすみあみを買ってきまして田圃の畦の縁にかすみあみを掛けたり、最後はずばらをして私の家の屋敷の中の木立からぱっと鳥が飛び出る、そこを捕まえたりしました。ひよどりを捕まえたりうぐいすとか目白とかそういうのを捕まえました。それは飼うわけです。ときには朝鮮雉という「でんぼふい、でんぼふい」と鳴く鳥が親子でやってきて捕まって、だけどあれは大きいから、かすみあみを破って大きな穴が開いちゃったんです。そのようにかすみあみというのも思い出がございます。鳥はずいぶんいました。今でも時々いろいろな鳥がやってきますけれど、昔はずいぶんいたなあと思っております。

春になりますと僕たち子供には別天地のようなすばらしいところがありました。それがさっき言った砂山というところですよ。今では片瀬川も引地川もまっすぐになっていますが、このころは今の太平橋のあたりまで引地川が来ましてあと、ぐっと西に流れていました。ですからさきほども出ました明治館というのは堀川田の東側にあったといわれています。そして相沢君の今の家のあたりを通って西に蛇行して山すそを流れていました。その蛇行の突端のあたりだと思いますが、そこに砂山があったんです。そこには木が生えていません。ですから上の平らの頂上、今ヴィラ・ウィステリアというのが建っているあたりから、砂山をごろごろごろごろ転がりながら下の小川のところまで下りてくる、これは楽しかったですよ。そこで鬼ごっこをしたり、大平台というのは我々の遊び場だったんです。そこには昔は大きな井戸がありまして、それは深い井戸だったんです。おととい相沢君は「100メートル以上あったんじゃないか」と言っていました、とにかく石を投げてもどぼんという音が帰るまでけっこう時間がありましたからかなり深い井戸でした。それでへりがありません。松林の中にその井戸だけ残っているんで

す。だからそこへ行ったら落ちちゃったら大変だというのが我々の子供の頃の心配だったのです。そういう砂山がありました、その下から清水が湧いていました。これがすごくいい清水で、春先になりますと芹とかはこべとかそういうものがいっぱい取れました、一年中取れたと言ってもよいでしょう。砂山からきれいな小川が流れていて、それが絶好な遊び場になっていました。川が随所に池を作っていました。堀川の古い人は池なのに「ああ、ふるっかわ、ふるっかわ」と言っていて、なんで「ふるっかわ」と言うのかと思いましたが「古い川」という意味のようです。伏見稲荷から雅叙園まで今は下水になって下にもぐってしまいましたが、あそこも「ふるっかわ、ふるっかわ」と呼んでいまして、それが古い川だったんですね。池として特に大きかったのは今の辻堂小学校あたり、それが一番大きい池でした。その頃鴨撃ちの名人といえば有田さんのお父さんで、私の親父の小学校、中学時代の友達ですから「有田のよっちゃん」と呼んでいて、子供まで「よっちゃん、よっちゃん」と呼ぶようになってしまっているのですが.....。「峻ちゃんいるか」と鉄砲下げて良夫さんが見えられて、その後をくつついていくんです。そこで行くのが「ふるっかわの池」なんです。そこに鴨がいっぱい来るから、それをドーンと撃つんです。それから猟犬を使って獲りに行くんですが、私は有田さんが鴨を落としたところを見たことはありませんが、とにかく面白かったですよ。なにしろ名人だったとの評判です。

あと魚取りの名人というのがいまして、一人は私の家の隣の若尾さんの親戚なんです、やはり土佐の生まれの人で高崎さん、この人は魚取りの名人でした。引地川の土手をこう歩いていて「あ、いた」と、鯉の背鰭がさっと見えると、昔の引地川の土手というのは今ほど急じゃないんでとんとんと駆け下りて行きます。そこにどぼんと飛び込んでさっと網で捕まえる、ちょっと言うと嘘じゃないかと思われるかもしれませんが、60センチ以上はあろうかという鯉をその高崎さんという人は捕まえるんです、名人でした。それと私の同級生で武田善平君「ぜんちゃん、ぜんちゃん」と呼んでいました、今でも近所におられますが、彼は棒杭のところへ行ったら鯉だとか鯰だとか素手で掴んじゃうんです。それは名人でした。魚取りでもそういううまい人がいるんです。そういうわけで引地川もまたかっこの遊び場でした。

引地川の今の河口のところ小田急のプールガーデンのところ、あそこに昭和10年頃に県営プールを県が作って、すぐ市に管理を渡して市営プールになりま

した。今では市内の小中学校全部にプールができております。あのころは各学校にプールというのは湘南高校へ行くしか他には学校にプールはなかったんです。ですから夏休み前には市営プールまでみんな行列して海水パンツを持って赤帽というのがありまして、赤帽をしていないと目印にならないということなのでしよう、それで鶴沼小学校からプールまで歩いて行きまして、そこで練習をしましてお昼に帰ります。帰りがまた楽しくて、シャワーを浴びて海水パンツを脱ぎますが、それを赤帽の中にお団子みたいに丸めて入れて、それをぶら下げて引地川の引地橋のところから川に下りてじゃぶじゃぶと竜宮橋、日の出橋、作橋、それから大平橋くらいまで来て帰ってくるのです。その帰りが楽しいんです。引地川には潮が引くと浅くなって中州ができます。じゃぶじゃぶと歩いてくると中州がありまして、そこらあたりに手長エビと言って、けっこう手の長いエビがいるんです。それを捕まえて帰ってくるとか、それから棒杭がずっと川の中にありますから、そのところで水晶エビという涼しい感じの、おいしいですよこれはてんぷらなんかになると、それを獲って帰った来たりしたものであります。

魚に関して言うと、一番いいのは堰がありまして、今の長久保と森井鉄工所の間くらいのところにその堰がありました。言うなればコンクリートの欄干のない橋がかかっていまして、その下に板を張って田植えのとき5月末くらいに堰止めるのです。そして9月10日頃、二百廿日のころそれをいっぺんにおっぱなすんです。相沢君の親父さんが請け負ってましたから、木の槌でもってボーンボーンと何枚も止めてある板を一挙に外すわけです。引地や石川の方から溜まっている引地川の水がドーンと流れるんです。そうすると下にはいろいろと淀みがありますから、それがいっぺんにかき回されたようにどっと流れるんです。すると魚がみな酔っ払ったようになってぶかぶか浮いてくるのです。最初に浮いてくるのが鮎とかうぐいとか、そういう魚は弱いですからが最初に浮いてきます。我々は大平橋の上のところでぶかぶか浮いてくるのを掬って捕まえます。二弾目が鯉とか鯰とか鮒とかそういうのが来ますからそれをまた竹箕たけみという、農具で穀物をあおったりするもの、その竹箕か網あみまた籠かごを使う人もいますが、それで受けて捕まえます。鯉と言ったって「こんな」（1メートルを超えるしぐさで）のが来ますから、これが鶴沼の行事としましては最大の行事で皆楽しみにしていました。鶴沼だけでなく最後の方は藤沢中から来てたのではないかと思うほど、あの土手にずっと人が並んでしまうほどの大賑わいでした。これが堰を放つということです。

秋の稲の取り入れ前の堀川田へ流していた用水を空にするということで、その用水は今の緑橋の近辺から大平橋から来た道祖神のところを通り伏見稲荷のところまで堀川田を潤していたのです。その小川を「ほりっこ」と呼んでいました。

それとさっきの砂山のところからはきれいな清水が流れていました。今の作橋のところ高島屋かなにかの寮のところの裏を通り、今の県営住宅のところ作橋の下のところには水は落ちていました。本当にきれいな水でそこにはいろんな魚がいっぱいいました、しじみもいっぱいいました。島根のしじみほど大きくはないのですが、たくさん獲れました。

私の鵠小時代の先生で鈴木助晴先生、鵠沼小学校の校長などをされた方ですが、その先生が結婚したばかりで「峻ちゃんうちの女房が黄疽になっちゃった。しじみが良いて言うんだけどどっかないか」「うんあるよ」ということで武田の善ちゃんと二人で先生の奥さんのために「ほりっこ」へ行って「そのかわり先生も取るんだよ」と言って一緒によく獲りに行きました。しじみが黄疽にいいという話がありました。

先ほど話をしました「ふるっかわ」の先の鴨打ちに行った池には「もくたがに」というのがよく獲れました。もくたがにを獲るために蟹網という簡単な網を仕掛けました。するごとそそそと掛かってこれが美味いんです。皆様ご存知だと思うんですがもくたがには「もくぞうがに」とも呼びますが、このへんではもくたがにと呼んでいました。親指のところが毛むくじゃらで、北は津軽半島から南は高知や熊本の方までいます。おそらくそれが東シナ海を通して上海あたりまでつながっているのではないかと思います。今横浜の中華街あたりで上海蟹というのが名物になっておりまして、確か10月1日が解禁でそれから麻糸で縛って空輸してくるのです。横浜の中華街で食べるより上海で食べる方が値が上がって高いです。私の感じではあれは日本で言うもくたがにの仲間じゃないかなと思っています。これがいっぱい獲れまして特にそこの「ふるっかわ」のところとか、片瀬川の河口でよく蟹網を掛けました。そして海岸にお餅を搗くときに使う大釜を用意しまして、塩水をぐらぐら沸かしてその中に取った蟹を全部ザバツと入れてゆでるわけです。そしてそれを肴に浜で浜風に吹かれて一杯やる、というのが昔の楽しみだったのです。実によく獲れました。

あと「ぼさ」というのがありました。私の家には椎の木が一杯あったものですから、片瀬川の川魚商^{がまな}がときどき「うちはうなぎややってるんだけど、椎の枝を

もらいたい」と言ってぼそっと切り落として持っていきました。椎の枝をまとめてぐるぐると巻いてそれに棒杭を付けて片瀬川の中に下げておきます。椎の枝のにおいが好きなんでしょうか、そこにうなぎが入ったり、もくたがはが入ったりします。それを上げて「ぼさ」からぼそぼそとうなぎやなんかを落として、そのうなぎを割いて売りました。黒川の銀ちゃんという「うなぎ屋さん」もいましたが、そういう川魚商のひとがこの「ぼさ漁」をやっていました。私が一年に一回ほどは行っている六郷の川魚を食べさせる店、てんぷら屋さん、があります。ここでは汽水域といって海と川の混ざっているところではやはり「ぼさ」で獲っていると言っていました。

もう一つ「もじり」というのがありました。これはうなぎを獲るわなですね。竹で編んであり端を縛ってあり、入り口のところに返しが付いていて入った魚が逃げられないようになっています。どじょう用というのは返しのところが一重でいいのですが、うなぎ用は二重に出られないように関門がありました。この中に「くさぼっこ」を入れまして、僕なんかは田螺がいっぱいいましたから、田螺を大平橋のコンクリートのところなどで欠きまして最初はそれをぶち込んでいました。しかし田螺よりは地引で取れたあじやなんかの茹でたやつを入れておくと、そのにおいでうなぎなんか引き寄せられて入ってきます。もじりはここらへんでは売っていません。浅場いさお君、みさお君、僕の同級生にはこの二人と竹内七ちゃん、八ちゃんという双子が二組おりましたが、その浅場兄弟が「峻ちゃん、もじりが秦野にあるから行くべえ」というので、小遣いだけ握って小田急でわざわざ相模大野に行って、秦野へ行って、僕は5本買ってきまして、満員電車でまた帰ってきたという思い出があります。それで翌朝からどこへ仕掛けるかという、大平橋の真下、そこは石でごろごろしていますが、深みがあるんです。そこへ少し長いひもを先っぽに付けて流していくように仕掛けます。そのようにして次々仕掛けます。夕方仕掛けて朝5時頃起きてこれを上げに行きます。するとだいたいこの深みのところでは、ちょうどいい食べごろというのでしょうか親指か中指くらいの太さのうなぎが一つに一本くらい入っています。そのうちに考えまして、子供というのは考えるもので、大平橋の下に石がいっぱいあります。私はその石をどけましてそこに仕掛けました。そのへんにはよくうなぎがいましたから。それで翌朝行きまして、仕掛けを上げて橋の上で開けてみましたら、にょろにょろにょろと25匹くらい入っているんです。ただ太さはちょっと細かつ

たです。ともかくそういうのも楽しみの一つでありました。

もう一つは「置き針」というのがあります。作文の課題で「僕健康法」というのを提出しまして、親父に知恵を授けられまして「夕方置き針を仕掛けて、朝獲りに行く、それが僕健康法である」とかなんとか書きまして提出しましたら、号令台のところで皆の前で読まれた記憶があります。今考えるとへたくそな作文ですが、とにかく1メートル位の竿を作ります、先が細くなっている釣竿ではなく単なる竹の棒です。その先にてんぐすを結わえ着けます。それになまず針とかうなぎ針とか大きな針を付けて、最初は行きに田圃の中で捕まえてつぶした田螺を付けます。それを30本とか50本とかザサッと用意して持っていく。大平橋と作橋の間とか、作橋と日の出橋の間とか、大平橋と堰の間とかにずっと仕掛けていきます。さきっぽに田螺を付けたものを水面にちょろちょろとなるように流していきます。それで「流し針」とか「置き針」とか言うんですが……。それで朝5時頃に行きますと、うなぎはまるまる癖がありまして、みち系の途中のところまでだんごみたいに真ん丸くなっています。ごよんごよんとしていかにも大物という感じで掛かっているのがなまずです。これは上げるのが大変なんで「これは最後に上げよう」とか言ったりして、なまずもよく獲れました。なまずは割と頭がよくて田螺なんかだと、夜えさを求めて来るわけですが、ひれでもってバサッと打つんです。すると田螺なんかははがれやすいから、そのはがれたところをパクッと食べるんです。ですからそういうことがあるといつも上げてみるとカラなんです。いろいろ考えて「田螺じゃだめだな」ということでどうしようを捕まえて橋の上でぶつぶつと切って、それだとはがれないですから、そういうものに変えた方が確率がよかったです。そういうような「もじり」とか「流し針」とか「置き針」とか一年中飽きなかったものです。

大平台という山がありますが、あそこは横浜の平沼さんが開発されて、当時の町長さんが大野さん、その大野と平沼を取って大平橋となったわけです。今辻堂の図書館のある土地は大野さんから分けていただいたのですが、あそこにお住まいでした。たいへいばしと言うと普通は太平と書くのかもしれませんが、大野さんに因んでおりますので大平橋と点がないのがあの橋の名前ということです。あそこの山は子供の鬼ごっこの場でありましたが、堰の上の方の山は「けんか山」と言いまして、それぞれけんかをしよう、ということになりますと「けんか山へ行くべえ」生意気なことを言いまして「いっぴきどっこいで行こう」などと言ったもの

です。ひとりずつでけんかをするんです、そういう「けんか山」などと呼ばれて
いるところもありました。いろいろな遊びの遊び場だったのですが、一番楽しか
ったのは松露^{しょうろ}採りですね。松露と言ってもご存知でない方もおられるかと思いま
すが、松の露と書いて松露、これが松の根元にあつて、6月頃一雨降りますと松
の根方を松の落ち葉を掻く「荒くまで^{あら}」という熊手、庭を掃除する細かい熊手と
はちがうものですが、それで掻くわけです。そうしますと砂の中から丸いきのこ
がころころといっぱい出てきます。これが松露です。昔は藤沢駅のたもとでもお
ばあさんが新聞紙を広げてよく売っていたとか、藤沢の和菓子屋さんが「松露」
という名前の和菓子を作ったりということがありました。松露というのは非常に
香ばしくておいしいきのこでした。朝まず私たちは松露を引っ掻いてそれを採り
ます。そして大平台の先に辻堂の演習場^{ぼうよう}がありまして、そこに防風、浜防風と言
って刺し身のつまなどに今でも時々出てきますが、今はここらでは採れません。
その防風をつまんで「びく」のなかに松露といっしょに入れて家に持って帰ると、
母親がそれをまぜごはんにしたり、おみおつけの中に入れたり、松露弁当を、こ
れは弁当としてうまかったですね、作ってくれたりしました。松露は当時鶴沼の
名物でした。よく早起きして採りに行きました。

そそろ時間が来たようです。まだ話したいことはいっぱいあるんですが.....。と
もあれ小学校時代の鶴沼というのは子供たちにとって別天地であつたというお話
をしました。これからいろいろあるでしょうが、なんとか環境を保全して、緑
と共存するようなものを作っていくということが大事ではないかと思います。こ
の鶴沼公民館でもよくお目にかかりました、ここにお住まいの黒崎義介先生とい
う絵描きさんがおられました。私が白百合の幼稚園に通つておりましたころ「キ
ンダーブック」で黒崎先生の「にこにこ、ふっくら」の絵を見たのがいまだに忘
れられません。黒崎先生のお宅に伺うと「峻ちゃん、庭にたらの木があるんだ。
あれがいいんだ、ちょっと行こうか」と言われて庭からたらの芽をつまんでこら
れます。「これをから揚げにしてさ、塩をちょっと振ってそれでビールでも飲み
ゃ最高だよ」と言われるんです。私も白馬に友達がいて、そこに行ったときにた
らの芽がありましたからその苗というのですか、若木を山小屋で分けてもらいま
して我が家に植えました。ちょっととげがあるんですが、たらの木は増えます。
ところがこのたらの芽の話をよく聞きますと「たらの芽文化論」というのがあり
まして、たらの芽というのはいっぱい芽が出るんですがみんな摘んじゃいけない、

といいます。最初の芽は摘んでいいけれど、二番目の芽は摘んじゃいけないというひとつの言い伝えがあるんです。二番目の芽を摘んでしまうとたらの木が枯れてしまうと。ですから地元のたらの芽を愛する人たちは野生のたらの芽でも一番目だけ摘んで、翌年もたらの木が残るように摘んでいくということが伝統的に残っています。ですがたまに来る人は枯れようがなにしようが構わないからいっぱい持っていつてしまうので、木が枯れてからぼうずになってしまうということになります。わたしは先日モンゴルに緑の木を植えに行った時に「森と緑の中国史」（土田 保氏著）という本を読みましたが、そこにも「たらの芽文化論」ということが書いてありましたが、そういう言い伝え、伝承を大事にしてやっていくということが文化なんだと思います。一方「たらの芽をそうやって摘むものじゃないよ」と言ったときに「それじゃお前の土地か」というように所有権を問題にしたり、あるいは警察権力を利用して入れせない、などという問題になってくるとこれは文明ということです。ですが元は文化というものが大事で、そういうことでたらの芽というものが保存されていく、食性との付き合いかたもそういうものだと思います。これから人間が自然というものと共存していくときにもそういう文化を大切にしていくことが大事なのだと思います。子供の遊びなどももっとお話をするつもりでしたが、時間の関係でこのへんで終わらせていただきたいと思います。

葉山 峻（はやま・しゅん）

1933年 藤沢市鵠沼に生まれる。

1952年 鵠沼小学校を経て湘南高校卒業

1959年 藤沢市会議員

1972年 藤沢市長、以後6期24年間在任

1996年 衆議院議員

主な著書に「都市文化論」（日本評論社）、「洗濯板のサーファー」（毎日新聞社）「語りかける言葉」（有隣堂）など

☆この講演会は「鵠沼を語る会」「鵠沼公民館」の共催で実施されました

一木通り草莽記

竹中 英輔（鵠沼在住）

（１）紀功碑

一木通りの踏切の脇の一段高い処に昔から石碑が建っていますが、私はその前を毎日通り過ぎていながら、今日に至までその碑文を読んだことはありませんでした。しかし会社を辞めてからは急に時間を持て余すようになり、ある日のこと散歩の途中、足を止めて碑文を読んでみたのです。石段を２段登り、枯れた蔦の茎をこすり落としながら、石に刻まれた文字を読んで見れば、驚いたことにそこには65年前の一木通りが鮮やかにタイムスリップして来るのです。まずはその碑文を読んでみれば次のようになります。

「天ノ時ハ地ノ利ニ如カズ地ノ利ハ人ノ和ニ如カズ相州中岡ノ地ニ一丈五尺ノ本道ヲ南北ニ通シ数条ノ支路ニテ東西ヲ分カツ耕地ハ井然邸宅ハ安定昭和7年7月起工翌年8月竣工耕地整理費金 3,600円水路工事費金 2,200円歳余ニシテ面目一新シテ六町余歩ノ

耕地ハ豪雨ニモ暴漲ヲ免レ蔬菜栽培ニ適ス 耕地整理関係当局ノ指導方針組合員ノ融和協調諸役員ノ奮励努力町理事ノ援助達成其ノ宜シキヲ得ザレバ則チ何ンゾ斯ガ如クナラン乎 所謂天時地利人和ガ最良ノ成果ヲ収メ得タル嗚呼 年豊カニ人楽シムハ聖世恩沢ノ良ク有ルヲ以テ也 茲ニ梗概ヲ陳ベ紀功碑ヲ建テ長ク後昆ニ伝フ」

中岡耕地整理紀功碑

男爵 野崎貞義篆額

天時不如地利地利不如人和相州中岡之地一丈五尺之本道通南北數條之支路分東西耕地井然邸宅安定昭和七年七月起工翌年八月竣工耕地整理費金參千六百圓水路工事費金貳千貳百圓歲餘而面目一新六町餘步之耕地適蔬菜栽培免豪雨暴漲耕地整理關係當局之指導方針組合員之融和協調諸役員之奮勵努力町理事之援助達成非得其宜則何能如斯乎所謂天時地利人和收得最良成果嗚呼聖世恩澤年豐人樂良有以也茲陳梗概建紀功碑長傳後昆昭和八年十月吉辰 中岡耕地整理組合長一木與十郎謹

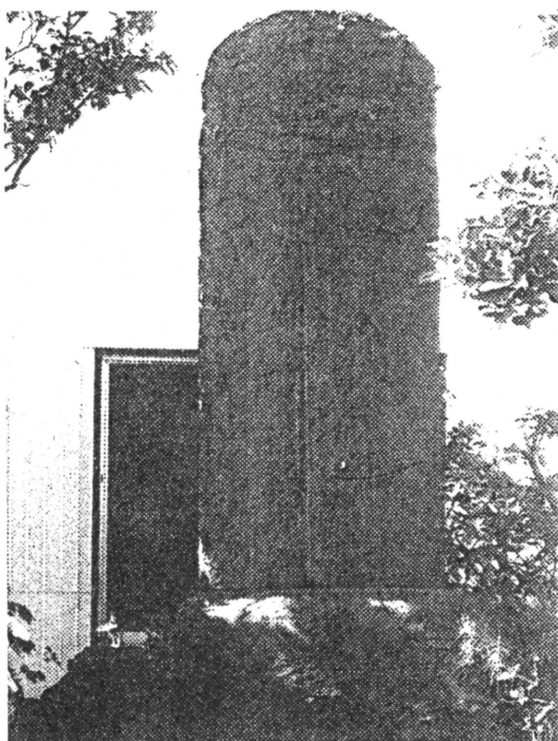
帝都賜菊園學會長 藤野 靜輝書

私は読み終わると茫然としてしまいました。そこには中岡の開発者の堂々たるメッセージが刻み込まれていたのです。

確かにそれからの一本通りは細かく分画されて次々に家が建てられ、やがて松林の間の静かな野菜畑が、鵜沼の中でも一番活気のある住宅地に変わって行ったのです。

碑文を読み終えた私の頭には過ぎ去った65年の思い出が走馬燈のようにグルグル回っていましたが、我にかえり四辺を見渡せば、一本通りは今は静かな長寿の里に変わっていました。

私は夏になると、また鳶の葉が繁り碑文が読めなくなると思い、急いでノートに書き取り石段を下りました。



昭和8年に建てられた紀功碑

(2) 竣工式

ところで私は石碑に刻まれた「昭和八年十月吉辰」とある日付を見て、幼かりしある日の出来事を鮮明に思い出したのです。

その日私はお手伝いさんに手を引かれて、踏切の脇の空き地へ出掛けたのです。そうです。確かにこの石碑の建っている一角です。そこは広場になっていて、すでに仮設の舞台が作られ、どこから集まって来たのか、黒山の人が幾重にも舞台を取り巻き、熱気をあげていました。

舞台の上では髷を付けた役者達が、強いライトを受けて刀を振り回し、足音高く揉み合っていました。私はセリフを覚えているのです。「死人の山を築いてくれん」。私は呪文のように唱えていました。踏切の脇には屋台も出ていましたし、ゴム風船が夕焼けの空に飛んで行くのも覚えています。

夜は映画があるというのでまた出掛けましたが、暗い画面にはついて行けず、

背負われたまますぐ眠ってしまいましたが、その日は私にとっては忘れられない一日だったのです。

私はそこまで思い出して、あの日の午前中に実は中岡耕地整理組合の竣工式が行なわれ、私のみた芝居はそのアトラクションではなかったかと思い付いたのです。

65年振りに碑文を読んで、この場所で行なわれた芝居の光景を思い出したのですが、黒山の見物人のなかからあの日のことをおぼえている人を捜し出して、昔話をしてみたいものだと思います。

(3) 中岡耕地整理組合

私は碑文を読んでいるうちに大事なことが語られていないことに気付くのです。それは支出については明確に記録されているのですが、5800円もの大金がどこから出たのかは明かされていないのです。

私は組合員が資金を分担しているのかと当初は思いましたが、その記名はどこにもないのです。また一本与十郎氏は当時町長をされていたと聞いていましたが、石碑には組合長とのみ刻まれているのは何故なのでしょう。か。「天時地利人和」が最良の成果を収め得たとは何を意味するのでしょうか。私は考えあぐねた末にこの謎を解いてみようとして「藤沢市史」を読んでみることにしたのです。

そして第6巻の第四章の「恐慌下の藤沢周辺農村」の「救農土木事業」の項に至り、該当する史実にたどりつきました。その項を要約すれば以下の如くになります。

すなわち昭和初期の大恐慌は農業に深刻な打撃を与え、全国に小作争議が拡大し、政府は慌てて対策を講ぜざるを得なくなったのです。

そして昭和7年8月22日第63臨時議会が招集され、救農土木事業を起こすことが決定され、昭和7年後期に全国で国費・地方費あわせて1億4000万円の追加予算が計上され、神奈川県に対しては総額179万円の予算が配分されたのです。藤沢町に対する県の土木工事費の配分は5560円と決定し、これに2383円を県が貸し付け（町債）、あわせて7944円で藤沢地区の道路改修と鵠沼・辻堂地区の土地改良工事が実施されることになったと藤沢市史は語っているのです。

さらに藤沢市文書館発行の「藤沢市事務報告書」のなかに中岡耕地整理組合の記録がありました。

昭和7年藤沢町事務報告書

本年ニ於テ横須賀耕地整理組合 鵠沼中岡耕地整理組合設立ナリ失業救済ノ一策トシテ引地川河川工事ヲ施工中ナリ

10月13日 石原森太郎 農村振興土木事業事務員ヲ命ズ

12月13日 稲葉久次郎 農村振興土木事業監督ヲ命ズ

昭和8年藤沢町事務報告書

耕地整理ニ関シテハ横須賀耕地整理組合 鵠沼中岡耕地整理組合アリ何レモ事業遂行ニ努力シツツアリ

昭和9年藤沢町事務報告書（欠）

昭和10年藤沢町事務報告書

12月10日鵠沼中岡耕地整理組合事務引継モ了シ横須賀及鵠沼耕地事業モ既ニ完了シ何レモ相当ノ成績ヲ挙げツツアリ

私は碑文をノートに書き取って以来、一木通誕生の真の姿を探し求めてきましたが、僅かに残されていたこの公式記録を前にして胸につかえていたものは消えて、一木通はこのようなして誕生したのだという想いがあふれ、人々がこの石碑を何故ここに建てたのか理解するに至るのです。

それからの中岡の耕地は野菜畑になっていたり、野原になっていたりしましたが、鵠沼の人口が急激に増加するにともない、土地は細かく区画され、土地所有者と借地希望者との間に借地契約が交わされ、時代の流れにそって当地は住宅地として急激に発展していったのでした。

同時に行なわれた横須賀耕地整理事業の土地には日本精工の工場が建設されてその後の藤沢の発展に寄与するのですが、全国で1億4000万円を投資した救農土木事業は昭和の農村大恐慌の打撃を克服するほどの効果はあげられず、増大する軍事費に押されて、昭和9年度をもって打ち切られたと記録されています。

（4）追憶 組合長一木与十郎

その日の朝、一木町長は町役場の職員稲葉久次郎を伴い、熊倉通踏切脇の自宅を出て、中岡の耕地整理の現場に向かいました。踏切のあたりには、地主さん達

が総出で町長を迎え、先日の大雨のときも雨水は水路を通り、小田急線の下を潜り、勢いよく流れたと報告しました。

中岡の地主さん達は、公費によって地整理事業が完成したことは「聖世恩沢」と感謝し、記念碑を建てることを計画して、一木町長にお伺いをたてたところ、一切の勲位肩書なしの組合長一木与十郎ならば石碑に記名してもよろしいと了承されました。篆額は鵠沼に在住の野崎男爵にお願いしたのです。

石碑の除幕式は祭礼のような賑いで、昼夜にわたり芝居と映画が打たれたのです。その後、地元の幹事は四角の杭を3本造って白いペンキを塗り、一木通

一丁目、二丁目、三丁目と墨書して道路標識にしましたが、それは地元民が一木さんを敬愛していたからなのでしょう。

藤沢市史に掲載されている一木町長の風貌は、野戦砲兵旅団長の精悍な面影を伝えています。ちなみに、明治44年に一木少佐が要塞参謀として構築した台湾の基隆要塞は今なお四つの砲台と大砲が一門残っていて、基隆観光スポットになっていると、基隆市の観光課から伺いました。

(5) 蛇さん さようなら

私が湘南学園の幼稚園に通っていたある日のことと申しても、そのときの湘南学園は2階建の木造の小さな民家に、幼稚園から小学6年生まで十数人の生徒が同居していました。私と友達二人は新しい道から家へ帰ってみようということになり、小高い松林の丘から裏の道に下りてみたのです。

一木与十郎氏 略歴

明治9年(1876年)福岡に生まれる

31年(1897年)陸軍士官学校(10期)卒業

陸軍砲兵少尉任官

38年(1905年)陸軍砲兵大尉

日露戦争の旅順要塞攻撃に参加

39年(1906年)陸軍大学に入学

41年(1908年)陸大卒業

陸軍砲兵学校教官

44年(1911年)陸軍砲兵少佐

台湾基隆要塞参謀

大正2年(1913年)下関要塞参謀

7年(1918年)陸軍砲兵中佐

陸軍砲兵学校教育部長

9年(1920年)陸軍砲兵大佐

12年(1923年)軍事視察のため欧米出張

13年(1924年)陸軍少将

野戦砲兵第3旅団長

予備役編入

昭和6年(1931年)10月 藤沢町長に就任

9年(1934年)3月 藤沢町長辞任

15年(1940年) 死去(?)

(加藤徳右衛門『藤沢郷土史』ほか)

初めて下り立った砂原は真夏の日射を受けて白く輝き、赤土を盛り上げた道が駅の方へ一直線に伸びていました。赤土の塊はそのまま転がっていて、人影はなく物音もしません。私達はそれでも勇気を出して恐る恐る歩き始めたのですが、すぐに足が釘付けになってしまいました。目の前の赤土の塊に蛇の大群がいたのです。蛇は人影に驚き、左右の草むらに先を争って逃げ込み、玉石を積んだ空の側溝（水路）の石の隙間に次々に滑り込むのです。私達は悲鳴をあげて一目散にもと来た道へ逃げ出すのですが、それが私と一本通りとの初めての運命的な出会いでした。

何故、一本通りの赤土の上に蛇の大群がいたのかは謎ですが、山から掘り出されて来た道路工事用の赤土に紛れて運ばれて来たのかも知れません。しかし二三年もすると、その辺りにも次第に家が出来て、蛇は影を潜めてしまいました。

蛇が消え人家が並ぶと、水路工事費 2,200円で造られた側溝が俄に活動を始めるのです。玉石を積んだ水路には両側の人家から流される生活用水が淀んでいましたが、一度大雨が降れば東西の松林の丘陵から雨水は一本通りめがけて流れ込み、水路は溢れて通りは忽ち川になりました。

ドブは雨があがると透明な小川になり、下流には緑の藻が水になびき、糸ミミズが赤く流れに揺れていました。小さな蟹も石垣に棲みつき、上流では芹も生えて、そこには忽ち小さな生き物の世界が出来ていました。夏の夕暮れには蜻蛉の大群が空をおおい、辻には蚊柱がたっていました。

水路には蓋がなく露天なので、人家が建て込んで来ると時々ドブさらえをしましたが、鵠沼にあって一本通りは下町の風情を呈していました。その名物のドブも昭和30年代の初めには地下に埋まり一本通りは舗装されたのです。

私は一本通りで道路を掘り返していると、足を停めて穴の中を覗き込み、一番底の部分の赤土の層を探すのですが、そこにはあの遠い日の蛇の思い出があるのです。

（6）餅まき

それは私が蛇の大群に出会った年の秋のことになるのですが、「富久屋」の小父さんが勝手口でいつものように話しているのを聞いていると、その日の夕方に新築の家で餅をまくというのです。私は好奇心をおさえられず、ころあいを見計らい一人でそっと家を抜け出したのです。

松林の小道を通り小田急の裏を抜けて一本通りへ出ると、何人もの人が同じ方向を目指して急いで歩いているのです。2本目の横丁を左に折れて野原を通り、松林に入ると、新築の家の敷地にすぐ出ました。

すでに大勢の人々が集まっていて、二階の柱がゆっくり立ち上がるのを見上げていましたが、人が次々に集まり大声で話し合い騒然としてきました。日が暮れてきて少し暗くなったところに高い所に人が登ると一斉に喚声があがり、場内は渦を巻いたように揺れはじめました。

私は餅がまかれるのだと身構えた瞬間、襟首をつかまれて体は宙に浮き、そのまま裏のテントまで運ばれると、そこは子供が列を作っていて、順番を待っているのです。私の番がくるとズシリと重い紅白のお餅の包みとお菓子の袋が渡されて、係の小父さんに「危ないから早く帰るんだよ」といわれました。

両手に抱えたお餅の包みは意外に重くて、家に帰ると怪しまれて叱られるのではないかと心配になるくらいでした。

ここまで思い出して、あのお菓子の包みは「富久屋」の小父さんが自分で袋に詰めて納入して、帰り道にその情報を私に知らせにきてくれたのだと、今ごろになってやっと気が付いたのです。

私は散歩の途中、景色が変わっていないその一角の二階の瓦屋根を塀越しに懐かしく見上げるのですが、少し足を伸ばして富久屋の店先に二代目のご主人が立っているのを見ると、その姿が近ごろだんだん亡くなったお父さんに似てきて、あのころの町の風景が昔のまま蘇えてきて、私は街角に足を止め思わずあたりを見回してしまうのです。

第二十三世本因坊坂田栄寿と鵜沼

鈴木 三男吉 (会員)



第二十三世本因坊坂田栄男氏が2月15日満80歳の誕生日を迎えるのを機に現役を引退することが、去る1月22日の新聞紙上に発表されました。その切れ味の鋭さによりカミソリ坂田と異名をとり、本因坊戦七連覇の偉業をなし遂げ名誉本因坊の称号を受け、一方理事長として8年間日本棋院の運営に当たり、更に棋界初めての文化功労者となった坂田栄男の名は碁を

打つ人で知らない人はいないほど有名です。しかし、この坂田先生が戦後すぐの一時期この鵜沼に住んでいられたことは、ほとんど知られていません。

ところで、素人の碁打ちは、一般に非常に謙虚で、人から「あなたは碁をおうちになりますか」と訊かれて「はい、少しは」と答える人は、かなりの打ち手です。私はこのことを知らなかったため、いくたびか大恥を掻いたことがあります。こういう意味で私が「あなたは碁をお打ちになりますか」と訊かれて躊躇なく「はい、少しは」と答えられるようになったのは、坂田先生が鵜沼に住んでおられ、直接稽古をしていただいたからです。ではなぜ先生が鵜沼に住むようになったのか？ その間の事情を先生自身に語っていただきましょう。

「結婚後一、二ヶ月して（結婚は昭和23年5月）私たちは独立した。ちょうどその頃、鵜沼（神奈川県藤沢市）に羽振りのいい人がいて、私に稽古してもらいたいとの話がおこった。月に一万円の謝礼だというし、手合料などほとんどはいらない時代だったから、これに飛びついた。勝ち気な妻の久子が両親と合わない面もあり、それも私達が独立した理由であるが、北浦和から鵜沼まで稽古に通うのも大変だということで、そこに移転することにした。

はじめ町会事務所の二階を借りて住みこんだ。ところが、この繊維会社の社長が、稽古を始めて二ヶ月経つと、これは夏の間だけのことだといひだし、これにはびっくりした。せっかく引っ越してきて新家庭を築いたのに、つまりそ

こで鹹になったのである。生活設計が完全に狂ってしまい、これにはがっかりもし、泣くに泣けない思いもした。

もっとも稽古がつづかないことについては思い当たるふしがある。というのは私の教え方はぶっきらぼうで、どんな相手もぼろぼろに負かしてしまう癖がある。稽古碁でも負けるのが嫌いで、ほとんどこちらの勝ちになってしまう。それともともとお世辞を言うのが上手でなく、シタ手の手をずけずけいってばかりとところがない。だから教えられる方も面白くない。ちっとも勝たしてくれないし、おべんちゃらもいってくれないというのでは、永続きしないのは当然であろう。それでは立派な教授といえないかもしれないが、とくに若い頃の私は相手に取り入ることが出来ない性分で、そのため客がつかなかった。

稽古がストップしてわたしは慌てた。やがて子供は産まれるし、世はインフレが昂進し物価はあがる一方である。これではいけないというので地元の人たちの応援を得て、住まいの町会事務所で坂田囲碁教室を開いた。

（中略）鵜沼にはかなりの身分の人が住んでいて、手合で生活できない私を応援してくれ、私も教室の仕事を一生懸命やった。それから二、三年は、四段時代に世話になった満鉄の岡田卓雄さんを除けば、私が自分の生涯のなかで一番稽古収入に頼って暮らしていた時代だった。それくらい生活が厳しかった。」（坂田栄男『坂田一代一勝負師の系譜』昭和59年5月、日本棋院刊）

このような経緯で坂田先生ご夫妻は鵜沼に来られ、町会事務所を仮住まいとし、坂田囲碁教室を開いたのです。この町会事務所は現在跡形もありませんが、商店街の南はしに近い濱野牛乳店の前の路地を入り右側にあった立派な二階建ての日本家屋でした。戦時中ここでしばしば町会が開かれ、私もここで長谷川欽一さんや先代の有田さんと知りあったのです。もちろん私もこの教室に参加しましたが、さいわい当時の拙宅に広い座敷が空いていましたので、教室のほかに坂田先生に来ていただき、四、五人の同好者が集まり特別の稽古を受けることになりました。岩谷 満、松島 与、頃末格一、志村佐一の諸氏でしたが、いずれも故人となられ、当時を偲ぶよすがはありません。

岩谷さんは当時岩谷書店を経営されていて、戦争のため休刊していた『囲碁春秋』をいち早く復刊され、その編集主幹をしていた安永 一氏を通じて坂田先生とは以前からの知り合いでした。私も岩谷さんから先生を紹介してもらったと記

憶しています。

志村さんを除いて私たちはすべて五、六目で稽古をしていただきましたが、一局を打ち終わると必ず並べ直して、悪手を率直に指摘されました。いわゆる手直しをして下さったのです。＜こんなところを突き抜かせたんでは碁を打つ資格ないですよ、押さえる一手ですよ、たとえ石が全部死んでも＞というような先生の甲高い声が今でも耳に残っています。私達素人にとって必要なのは、遠慮のない率直な悪手の指摘で、これが一番勉強になりました。お世辞やおべんちゃらが必要なのはいわゆる旦那碁で、私たちにとっては坂田先生は立派な教授でした。志村さんは一人別格で、幼いとき院生の経験があるというので、先生と三目で一杯の碁を打っていました。

結局、稽古碁とはいえ、先生には一度も勝たしてもらえなかったと記憶していますが、腕の方はめきめき上達し、昭和25年4月には坂田先生の推薦で、日本棋院から初段の「免状」がもらえることになりました。もちろん免許料を払ったことです。これはお世辞やへつらいの大嫌いな坂田先生の推薦ですから、実力でもらったものだとも今でも信じています。

坂田先生が鵜沼に住むようになった直接の理由は、先に述べたとおりですが、その背景には、日本全体がそうであったように、囲碁の世界にも激動と混乱がおこっていました。前田陳爾七段を先頭に八名の若手棋士が日本棋院を脱退し、別に囲碁新社を設立したのです。その主張を訊くことにしましょう。

「吾らは今回日本棋院を去ることになりました。（中略）日本棋院成立以来二十五年、その果たした役割は偉大なものがありました。しかしながらその反面二十五年の年月が積み重ねた病根は、もはや内部改革という漸進的手段では如何ともすべからざる状態に迄立ち至ったのであります。安易なる昇段制度、無秩序に累積する内部規定など、すべては旧来の惰性の中にあって一步も前進さえないのであります。……（中略）かれを思い、これを思い、更に棋院内部機構の桎梏を離れて自由なる天地に、真実の囲碁を樹立したい吾等は、敢えて脱退を決意したのであります。……（以下略、『囲碁春秋』昭和22年8月号による）

囲碁新社が設立されたのは昭和22年5月のことで、もちろん坂田先生も若手

随一の实力者としてこの新社に加わっていたのです。そして新社は春秋年2回の手合いを毎月一回とし、また時間制限やコミ碁を廃止するなどいろいろな改革を行い、発足しましたが、新聞社など強力なスポンサーの協力がえられず、次第に経済的に行き詰まっていきました。この間財界の有力者などの支援もありましたが、やはり限界があり、有力者などの薦めもあって、昭和24年3月、全員が日本棋院に復帰することになりました。囲碁新社はわずか一年十ヶ月の寿命でした。したがって、先生が23年に鶴沼に移られたときは新社時代で、新聞碁を打つ機会も少なく稽古場にも不自由で、収入も少なく、月1万円の稽古料に飛びついたのも無理ないと思います。新社時代の新聞碁は、以前から話のあった呉清源との三番碁だけで、手合い料は一局1万円、計3万円で、このおかげで結婚式も挙げられたそうです。しかしこの三番碁は0勝3敗の成績で、新社の命脉を縮めた一因になったかも知れません。

日本棋院への復帰は昭和24年3月ですから、鶴沼に来て間もなくで、まだ町会事務所の二階を借りていたときです。復帰直後の坂田先生の成績はあまり芳しくなく、春は四勝四敗、秋は一勝五敗という惨憺たるものでした。ちょうどこの頃、夫人のお産のため湘南学園の近くに家を求め一居を構えることになりました、間借りでのお産、新社消滅の空しさなど、勝負に徹しきれなかったのもまた当然のことでした。

新居に移られてからの先生は、めでたく出産を終え、生活も落ち着くと同時に成績も次第に上がり、手合いも多くなり、稽古場も大森や新橋に設けられ、たいへん忙しくなられました。エネルギーの消耗の激しい勝負師にとって、3時間以上もかかる自宅との往復は大きな負担となるのは当然のことで、昭和27年9月、坂田先生は再び居を東京（大森）に移すことになりました。

坂田先生の鶴沼居住がこれだけで終れば、鶴沼の思い出は80年の生涯のなかの一つの泡沫として消え去ったかも知れませんが、東京へ移る一年前の昭和26年、勝負師坂田栄男が新しく誕生する転機となる重要な手合いをすることになったのです。日本棋院へ復帰後、次第に実力を発揮して第6期本因坊戦の挑戦者となり、当時の本因坊橋本宇太郎と七番勝負をすることになりました。この勝負の模様を、飲み友達として、親友として、また作家として、人間坂田を一番よく知っている近藤啓太郎氏に聞いてみましょう。（近藤啓太郎『勝負師一代』昭和60年、ペップ出版、から引用）

「昭和二十六年、第六期本因坊戦に、三十一歳の坂田は初めて挑戦者となった。相手は前年の第五期本因坊戦で、岩本薫から四番棒勝ちで本因坊を奪取した橋本宇太郎である。その頃、橋本は関西棋院を率いて日本棋院から独立したため、東西間の対立感情には凄まじいものがあった。坂田は初めて本因坊戦の挑戦者になったのに加えて、関西棋院から日本棋院への本因坊位を奪い返すという大役を担ったわけである。

坂田は一局、三局、四局と勝ち、橋本をカド番に追い込んだ。もはや本因坊の奪回は成ったとして、日本棋院では戦勝ムードに溢れていた。日本棋院では坂田激励会を催したが、内容は祝勝会といってもよかった。激励会では浮ついた会話が交わされ、歌がうたわれた。独立したばかりの関西棋院もこれでたちまち没落して、いい気味だといったような言葉さえ屢々発せられた。こういう浮ついた雰囲気には坂田が影響されないわけはなかった。

一方橋本は静かに心を養っていた。いつもは対局の前日に家をでる橋本が前々日に身延山に参詣して、山麓の宿に一泊した。翌日、対局場昇仙閣に着くと橋本は関係者に対し微笑をもって挨拶した。

”首を洗ってきました”

第五局は勢いに乗った坂田が切っ先鋭く攻めて攻めて、橋本を敗勢に追い込んだ。橋本は隠忍自重、受けに始終して、坂田の失着を待った。カミソリ坂田に対しては受けに徹底する以外に手がなく、それで負ければ仕方がない、と橋本は悟っていた。この悟りが、起死回生の道につながったのであった。

終盤坂田は時間に追われだした。あせって読み違いを生じた。劫生きの隅の石を、坂田は無条件にとられて、万事休したのであった。

第六局も橋本は隠忍自重して受けに終始し、坂田の自滅を待ったが、その作戦通りになった。

第七局は坂田も作戦を練った。終盤、時間に追われての失着が命取りになっている点を反省した。坂田は時間の配分に苦心し、二日目の夕食後、なお三時間を余していた。坂田優勢であったが、優勢を意識して今度は堅い手を打ち過ぎた。堅い手は、堅い心といってもよいであろう。坂田はリズムを狂わせ、橋本はそこにつけいって逆にリズムに乗った。そして、逆に坂田は敗れた。

”碁の質は坂田さんのほうが私より上です”

橋本は第六期本因坊戦の最中、そのように述懐している。坂田の敗因は何であろう。体力の点でも、三十一歳の坂田が四十五歳の橋本に劣るとは思えない。結局、坂田は精神力において橋本に負けたのである。」

坂田先生は、あと一勝で本因坊というところで三連敗したのです。先生自身の言葉をかりれば……

『この敗戦は大きなショックであり奈落の底に沈められたような苦痛と屈辱を味わった。それから十年の雌伏を強いられ暗い時代を送らざるをえなかったが、しかし日が経つにしたがって苦しみも薄れ、むしろその失敗を肥やしにして次のものをつかもうという気持ちに変わっていった。むしろ今にして思えば、あの時本因坊になれなかったことは幸運だったといえたかも知れない。仮に運よく橋本先生に勝ったとしても、次の年にはタイトルを手離すことになったとおもうからである。そしてまた本因坊戦に七連勝し、名誉本因坊の称号を与えられた坂田は生まれなかったと思う。当時の私は人間的にまだまだ未熟であった。』（前掲『坂田一代』より）……と。

坂田先生はこの後もしばらく鶴沼にとどまり、私たちの稽古を見て下さったのですが、この直後「人間、慢心ほど怖いものはないですね、橋本さんをカド番に追い込んだ時から、自分がすでに本因坊になったという気持ちが頭から離れなかったんです……」と話されていたことを、今でもはっきりと覚えています。鶴沼という土地は、こういう意味で坂田先生にとって忘れがたいものとなったのです。現役引退の記者会見のときの先生の写真には、やりたいことはすべてやり遂げた満足感が溢れているように思われました。

【追記】坂田先生が飛びついた稽古料1万円という額が、現在どのくらいになるかを調べてみましたら、およそ60万円～70万円に当たります。当時の銀行の大卒初任給が大体3,000円だったそうですから、現在を18万円～20万円とした計算です。やはり飛びついたのも無理はないと思います。

また坂田先生が東京へ戻られるとき、二段を推薦してもいいと仰って下さったのですが、生活の一番苦しかった時代なので辞退し、そのままになり私自身免状は初段、実力二段とばかり思っていました。今回この稿を書くに当たって初段の免状を取り出してみましたら、何と二段の免状も入っていました。やはりその後（昭和29年）生活苦を脱して改めてもらったのをすっかり忘れていた次第です。

史跡見学—鵠沼本村地区

中 島 明(会員)

平成11年度の「史跡見学」は、明治半ば以降発展した南部鵠沼地区のルートである「鵠沼本村地区」で行うことになり、去る11月16日(火)、11月例会を地区内の普門寺庫裡にて行った後に実施した。

参加者は、有田、浅沼、伊藤、植松、川上、川嶋孝、古宮、志村、鈴木武、鈴木三、高三、内藤、中島、永井、榛葉昭、松岡会員の計16名で、資料提供案内説明者は地元「原」の榛葉会員がした。

見学順路は 普門寺→斎藤家(長屋門)→藤森稲荷社→法照寺と石塔群→皇大神宮(山車庫)→万福寺→首塚碑と庚申塔→空乗寺 である。

普門寺 川島住職夫人より「密厳山遍照院と号し、高野山真言宗、もとは藤沢大鋸の感応院の末寺、享祿元年(1528)5月良元僧都が唐土ヶ原に草創しました。元和3年3月に元朝阿闍梨が本尊不動明王を勧請し、現所に再開基しました。延宝年間頃善龍によって中興され、当代は第56代目になります。当寺は、江戸後期に発起人浅場太郎右衛門に協力して、相模準四国八十八ヶ所霊場を創設しました。なお、当寺の札所は第47番、88番で、境内の右側に瓦葺き方桁造りの大師堂があります。」との説明があった後、本堂に案内されて、一般には公開されていない当寺の本尊不動明王、大日如来、阿弥陀如来等の仏像と平安時代のもと言われている、古い両界曼荼羅等の仏画を夫人の説明を聴きながら拝観して、午後1時頃普門寺を辞去した。



普門寺について語る川島住職夫人

斎藤家（長屋門） 一大斎藤とも言われ江戸時代に代々名主を勤めた、当代の主人の手で開かずの長屋門が開けられて、長屋門と家の中にも案内され、明治初年に建てられ関東大震災にも耐えた茅葺の屋根の太く縦横にがっちりと組み立てられた梁、大黒柱等の家の骨組みを見学した。現在は茅も少なくなっ
て新しく葺くことができなくなり、戦後に茅葺きの屋根の上をレジノイド鉄板で覆ってしまったこと、750年前に祖先が現所へ三河より来たときは、家の南は海であったためここを昔より「南」と言われているとのことであった。又、長屋門も名主の旧家にふさわしく格式がある。

藤森稻荷社 一関根家邸内のこんもりとした森の中にある鵜沼最古の稻荷社。

法照寺と石塔群 一善光山天龍院、浄土宗、開山直為、創立享保年間(1726～36) 一説には寛文元年(1661)龍保の創立と言われている。境内には多くの石塔群〔弘法大師像、江の島弁天道標（杉山検校建立）庚申塔10基〕あり、内容について案内説明を受ける。

皇大神宮（山車車庫） 一神社の長い参道を歩くと、境内の一段と低い広場の左右両側に縦長の人形山車庫が9戸並んでいる。その中の右側にある「原」の車庫のシャッターを開け人形山車を拝観する。人形山車は総櫓造りで、屋台の高さは約4.5m、二層が約1.3m、三層が約1.2m、これに人形が飾られて乗せると総高およそ9mになるという。屋根は破風屋根、柱、欄干に精巧な彫刻が施されている見事なものである。なお、「原」は8番で人形は日本武尊、人形は車庫に入れず各町内で大事に保管されているとのこと。山車拝観後本殿に向かい一同礼拝し、関根宮司が皇大神宮の由緒について次ぎのように説明された。「当社は神明様、烏森神社とも言われています。社伝によれば天長9年(832)に社殿が建立され、御祭神は天照皇大神、相殿に天手力男命外四柱を奉斎しています。延喜年間(901～22)相模国土甘郷の総社に列せられて相模国土甘郷神明宮と称し、人々の尊崇を集めることになりました。また、長治元年(1104)には鎌倉権五郎景政所領の大庭荘を伊勢神宮に寄進したので、大庭御厨と呼ばれるようになってからは、その広大な伊勢神領の大庭御厨総鎮守と定められました。

例祭は八月十七日。当日九基の盛装した人形山車の参進は特筆すべき盛観で、湯立神楽を含めて神奈川の民族芸能として県の指定があり、更に例祭そのものが神奈川のお祭り五十選に選定され、また、人形山車は昭和六十三年に藤沢市重要有形民俗文化財に指定されました」



関根宮司より皇大神宮の由緒を聴く

万福寺 一山号清光山、浄土真宗、本尊阿弥陀如来、開山源海、創立寛元3年(1245)開山の源海は親鸞の高弟、江の島において感得した本尊を祀ったと伝えられる。墓地には藤沢宿の旅籠大磯屋の墓があり同時に飯盛女の墓もある。江戸時代書家、俳人として知られた阿部石年、大正初期に活躍した女流作家内藤千代子の墓がある。それらの外に珍しい筆塚等もあり、荒木住職夫妻からぼつぼつと降り出した雨の中を傘もささず案内説明いただいた。

首塚碑と庚申塔 一かつてここに金堀塚あるいは、首塚、庚申塚とも呼ばれた小塚があったという。明治12年(1879)、村民の発起でこの塚の由来を解くために発掘、発見した二人分の遺骨をかめに納め改葬し碑を立てたとのこと。

空乗寺(大橋重政夫妻の墓) 一山号金堀山、浄土真宗高田派、本尊阿弥陀如来開山了受、開基大橋龍慶(重政の父)、創立永禄年間(1558~70)頃。領主大橋重政夫妻の墓がある。皆で藤沢市文化財に指定されている重政の墓を拝観した。なお、重政は14歳のとき徳川家光の右筆となった外、書家として大橋流書を一般庶民の間にも普及させたとのこと。

空乗寺見学を終わったところで、朝より小雨模様のところ、折しも雨が本降りになる肌寒の天候で、見学予定地もまだ残ってはいたが、やむなくここで見学会を終了し解散した。約2時間あまりの史跡めぐりではあったが、普門寺の本堂、大斎藤(長屋門)、神明宮の山車庫の見学は特に興味深いものであった。

終わりに、例会会場を提供されたうえに、普門寺の歴史や本堂の仏像等の拝観に格別のご配慮をいただいた川島住職、夫人に心から謝辞をのべたいと思う。

又、悪天候の中、終始懇切丁寧な案内説明役をされた榛葉会員ご苦労様でした。

平成11年度 公民館まつり記録

1. 期 日 平成11年(1999年)10月23日(土)～24日(日)
2. 会 場 鵠沼公民館1階読書ロビー壁面
3. テーマ 「塩沢コレクション」から

今回の公民館祭りには、「鵠沼を語る会」の元会長塩沢氏ご遺族から贈呈された、いわゆる「塩沢コレクション」の一部を公開することにしました。このコレクションは前号でご紹介したとおり内容が多岐に亘り、まだ十分整理されていませんでしたが、非常に貴重な資料が含まれているので、その一部でも早く鵠沼の皆さんにご覧いただこうと思った次第です。

まず、1) 郷土史的なもの、2) 鵠沼に関係の深い作家の作品、3) 鵠沼の自然、4) 地図、5) その他、に大分類しました。その結果、展示したのは次の通りです。

1) 鵠沼に関係の深い作家たちの作品

(内藤千代子、岸田劉生、芥川龍之介、広津和郎、邦枝完二、宮内寒弥、今井達夫、子母沢寛、安岡章太郎など)

2) 「クゲヌマラン」の図譜

3) 著名人の住んでいたところを示す鵠沼の地図

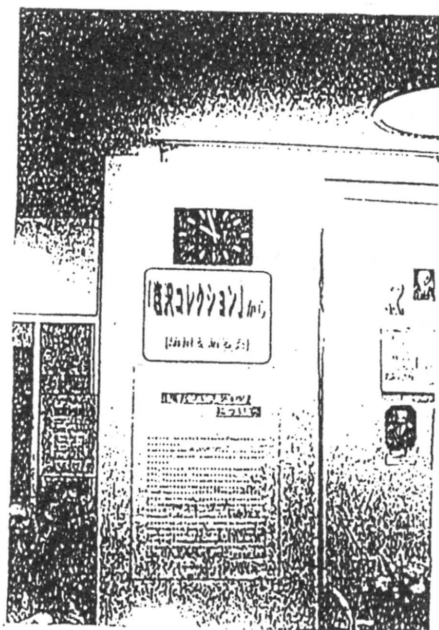
4) 鵠沼の変遷を示す写真、郷土史資料など

幸い天候に恵まれ、多くの方々に見ていただくことができ感謝しています。やはり、一番多く足を止めたのは、「著名人の住んでいたところ」を示す地図だったように思われます。もちろん今回展示した地図は、塩沢氏の苦心してつくられたものですが、それでもまだ完全といえませんが、いずれ会としても更に補完して、なるべく完全なものにしていきたいと思っています。

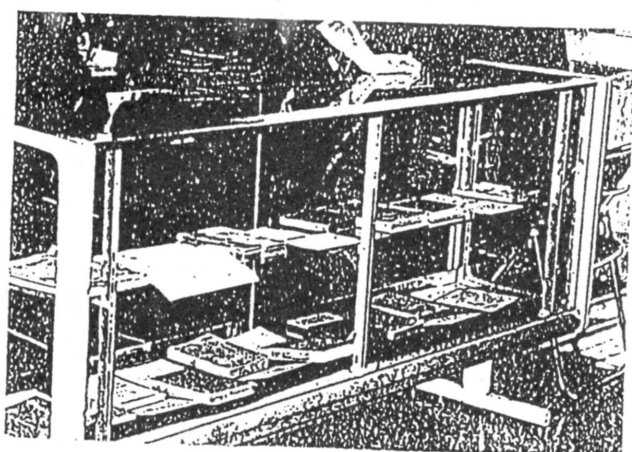
また今回は、「鵠沼を語る会」についての関心とか、あるいは会誌『鵠沼』閲読の希望などのアンケートを行い、多くの方々から回答をいただき有り難うございました。しかしその結果を、どう生かすかについては残念ながらまだ解答が出ておりません。

塩沢コレクションについては、大体の整理を終え、現在目録を作成中です。そして将来は広く同好の士の閲覧に供したいと考えておりますが、その方法がむずかしく、これも目下思案中です。

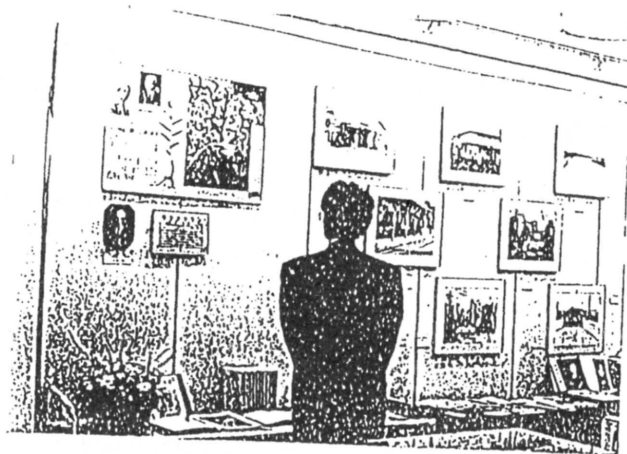
(文責・鈴木)



[左] 会場入口のポスター



[下] 内藤千代子など作家の著作



[右] 著名人の住んでいたところ

[上] クゲヌマランの図解、昔の鵜沼風景



「~~鶴沼を語る会~~」活動の記録

(平成11年10月～平成12年3月)

総務 中島 記

~~平成11年10月例会~~ 10月12日(火) 10時～12時 20名出席

議題(1)公開講座の結果の件 一葉山氏の公開講座は、約130名の参加者あり盛会であった。

(2)公民館祭りについて 一展示テーマを「塩沢コレクションから」とする。その他、前日の展示資料搬入、展示物設置飾付け等及び23日、24日の午前と午後に会場に詰めて、展示物の説明及び、貴重な資料の保全をする各々の担当者を決めた。

(3)史跡めぐりについて 一今年は鶴沼本村地区と決め11月16日(火)に実施する。例会、及び昼食後に普門寺より出発する。資料提供及び案内説明役は榛葉会員が担当する。

(4)その他 一会誌「鶴沼」第79号を出席者に配布。欠席会員、その他主要な配布先について担当者を決めた。 新入会員 志村光子氏紹介

~~平成11年11月例会~~ 11月16日(火) 10時～12時 17名出席 会場一普門寺

議題(1)公民館祭りを終わって 一23日(土)、24日(日)と好天に恵まれ、大盛況であった。

(2)会誌の発行部数及び配布について 一公開講座と公民館祭りでの希望者に配布するため急速50部増刷。今後継続して欲しい人達の扱いをどうするか、検討課題。

(3)東屋記念碑設置について 一東屋玄関入口跡にある永井宅の角をどうかと打診中。

(4)新年会について 一1月例会終了後行う。会費1000円で昼食その他を佐藤、野口両会員に準備依頼す。 新入会員 浅沼正城氏紹介

~~平成11年12月例会~~ 12月14日(火) 10時～12時 20名出席

議題(1)会員外の会誌希望者の扱い、配布について 一葉山氏講演会、公民館祭り時の会誌希望者には無料で配布する。配布方法及び継続希望者の扱いについては、次回例会で決める。

(2)会誌第80号の編集について 一内容は「葉山峻公開講座」と「商店街の今昔」をメインに、従来と同様のページ数にまとめる。4月例会に配布予定。

(3)「東屋旅館」記念碑とその後の経過について 一東屋入口跡の永井宅の角地を借りて石碑を設置する内諾を得られたが、案内板等の設置について他の候補地を当てる要あり。

(4)塩沢コレクションについて 一内藤会員の好意で内藤宅に全て保管されたが、あくまでも一時的なもので、永久保存できる場所を確保することが必要である。

(5)新年会について 一1月例会終了後。弁当等準備のため1月6日迄に参加者確認。

(6)その他 一会誌配布先と責任者を明確にする配布リスト表を松岡会員が作成した。終了後、高木前会長より「関東大震災の経験と日本をめぐる大地震」の話があった。

又、その後に、市より鈴木、篠崎氏出席し、石碑建立のめどがついて案内板の場所も会に手配依頼あり。市側は設置案を策定し来春の市会に諮る予定という。新入会員青木悠氏紹介

平成12年1月例会 1月11日(火) 10時～12時 24名出席

議題(1)東屋記念碑、その後の経過について 一案内板候補地難航、杉沢宅を折衝中。

(2)会員以外の会誌希望者の扱いについて 一応今回の第79号で無料配布は終了、継続読者を募らない。今後も会のPR等で必要と認める場合は無料配布を実施する。

(3)「鵜沼海岸商店街の今昔」の話を聴く会の開催について 一商店街側の人選は有田会員に一任する。日時、1月23日18時～20時、会場予約、進行方法は編集会議一任。

(4)その他 一公民館との共催公開講座については、次回の例会で実施するか等決める。

「新年会」12時～13時 23名出席、昼食をとりながら懇談する。

平成12年2月例会 2月8日(火) 10時～12時 21名出席

議題(1)東屋記念碑、その後の経過について 一案内板候補地杉沢宅は事情により断念した。

(2)今年度公民館との共催講座について 一特に現在共催するような特別な企画も無く見送る。ただし、探求クラブが「藤沢・鵜沼地区の防災対策を考える」集いを公民館と共催で行う計画あり、当会も協力して歴史的分野で共催参加する。

(3)過日の「鵜沼海岸商店街の今昔」座談会報告 一出席者商店街側、鯨井氏他5名、会員13名、有田会員の司会で午後6時過ぎより2時間余り、熱心に出席者より戦前、戦後の商店街の様子がいろいろと語られた。

(4)その他 一高木顧問は去る1月30日に、久保医療文化研究所が主催する第11回久保医療文化賞を受賞されたので、会としてお祝いの記念品を贈ることを決めた。

平成12年3月例会 3月14日(火) 10時～12時 22名出席 高木顧問出席

議題(1)会誌「鵜沼」保管と貸し出しについて 一内藤会員の尽力で公民館に別途格納ロッカー設置、希望者は備え付けの貸出簿に記入して借りる。貸し出しは原則例会日とする。

(2)市長等に郷土史関係の資料室を公民館に開設するよう要望書を提出する件 一公民館コミュニティセンター化運動と連携しセンターを実現させる。その際資料室を是非開設して欲しいが、その運営や管理についていろいろと意見が出て、今後の検討事項となる。

(3)来年度の会の運営について、組織、行事等 一会の主たる行事の企画運営を、現状は少数の編集会議のメンバーで検討し実行している。来年度は会の組織化と役割の明確化を計って、新人の人達にも積極的に協力していただく。具体案は次回例会で決める。

(4)その他 一会員の榛葉敏行氏は商売を営む傍ら、熱心に戦前、戦後、現在の商店街の地図と、各商店の歴史等を調べて貴重な「商店街の今昔」示す基礎資料を作られた。又、古い歴史的建造物の保存運動している桑山、佐藤氏来会し、松が岡の渡辺邸保存に協力要請あり。

編集後記

* 予定どおり第80号をお届けすることができましたが、まずお詫びしなければならないのは、当初今回の特集として予定していた「鶴沼海岸商店街の今昔」を次号にのばしたことです。商店街の方々にお集まりいただき、永年に亘るご苦労話をうかがったのですが、その資料として、昔からの「商店街マップ」をつくることになり、更につくる以上は、できるだけ昔からの、そしてできるだけ正確なものにしたいということになったからです。目下会員の榛葉（八百力）さんがせっかくの日曜日を返上してまで、この貴重な資料に取り組んで下さっています。

* 昨年の6月頃、佐藤さんと一緒に葛巻さんを病院にお見舞いする機会をえましたが、これが最後となりました。身体はかなり弱っていらしたようですが、容姿は昔のまま端然としていらしたのが強く印象に残っています。

* 渡辺実郎も本誌でいずれ「歴史的建築物」として取り上げたいと思っていましたが、桑山さんのお誘いで、今回巻頭を飾ることができました。桑山さんは、藤沢在住の建築家で、現在、大鋸にある旧モーガン邸の保存運動を熱心に行われている方です。

* 鶴沼一木通りに古くから在住の竹中氏から「一木通り草莽記」をご寄稿いただきました。ありがとうございました。そのほか、生粋の鶴沼っ子と呼ばれる葉山峻さんの公開講演記録、地元では「ステルン」と呼ばれ、震災前から鶴沼に住み、劉生とも交友のあった異人さんの解明など、今回もまた充実した内容です。しかし巾幗作家の名が見えないのが残念です。（鈴木）

『鵠沼』 第80号

平成12年3月31日発行

本誌の記事引用の際は
ご連絡ください。

編集・発行 鵠沼を語る会

藤沢市鵠沼海岸2-10-3

鵠沼公民館内

電話0466-33-2001